想書には參照すべき好著として擧げられて居る。次に昨年『新時代叢書』の中の一冊として『プロレットカルト』[Proletcult (Proletarian Culture,)1921] を公刊した。私が今解說しようとして據つた臺本は此の二冊だ。其の他に雜誌へ寄稿した論文があるかも知れないが、少くも最近まではさうした論文は無かつた。

先づ彼の一般的の思想背景を述べて置かう。其れには第一にアンリ・ベルグソンの哲學がある。元來彼は哲學の方面にも相當の知識といふよりは性格的に興味があると見えて、屢々あちこちに哲學上の用語を使ひ、又其れをもじつて使用して居る。例へば彼が『階級意識無上命令』[Class Conscious imperative] なる語を使用したのは、言ふまでも無くカントの『範疇的無上命令』の語をもじつたものであらう。『創造的革命』なる書名も亦、ベルグソンの『創造的進化』の書名を一寸だけもじつて、彼の思想が進化的では無く、革命的であることを言つたのである事は一見して知れる。此れも亦多少餘談に亙るが、一體彼の著を讀んで見て、他人の思想を利用するに、常にかうした才子風な、詩的な氣分を示して居る事に氣附くのである。ベルグソンの創造哲學の影響は至る處に現はれて居る。併し彼は亦他面では、批判的の立場に立つてベルグソンの哲學の認識論的缺陷を知らないのでは無い。たゞ彼の性格として此の創造的なる、動的なる哲學に魅力を感ずるものらしい。人間は狹義の意味での藝術家では無くとも、哲學者も科學者も共に廣義には一個の藝術家だ。ベルグソンの哲學が我々を惹き附ける所以は、彼が知識の世界のみを高潮せずして、寧ろ其の背景の衝動的世界を高潮した事だ。或る人は彼の哲學をば、哲學では無くて詩だといふ。併し我々には其んな事は何の關係も無い。詩で十分である。彼は斯樣に論じた後、其の著の末尾を次の言葉で終つた。『「□□への意志」[此の言葉も亦ジェームスの「信ぜんとする意志」より取り來つたものだらう。]は、我々に取つて、今や進みつゝある創造的□□、人間の運動に於いて、自由への巨大なる進みを合圖するならん其の□□の眞の原因だ。若しも此れが詩に過ぎないものならば、我々は詩人と共に言はう。「なほ自由、

なほ汝の旗は、裂かれつゝも飛び、風に向つて大雷雨の如くに翻る」」と。(1)ボオルに取つて「進化」なる語は議會主義を現はす。其れ故にベルグソンの書名は當然「創造的革命」と改められねばならなかつた。

次にはダアウィンとニュートンの思想も亦影響を與へて居るけれども、此れは別段に書くほどの事でも無い。其れよりも興味深いのは、彼の思想にフロイド一派の精神分析學の背景の可成りに強い事だ。社會□□と精神分析學―、其の對照は何といふ不思議のものだらう。併し仔細に見れば、此れとて別に突飛な事では無い。□□と精神分析學が關係を持つといふよりは、寧ろベルグソンの反主知的哲學、心理學的哲學とフロイドとに關係を持たせたと考へればよいのである。精神分析學によれば、我々の行動を決定するものは、知識的な、意識的な精神要素だけでは無く、寧ろ其れよりも有力なものは、其の背景に無意識的に潜む全體的精神内容だといふ。此の點がボオルの創造的な、衝動的な思想に共鳴を感ぜしめた。

其れ故彼は此のフロイドの精神分析學、即ち彼が自ら呼んで「新心理學」と爲すものによつて、マルクスの唯物史觀をすら説明し直さうと試みた。蓋しマルクスの唯物史觀は、ヘエゲルの辨證論理の價値を存在に引き直したものであり、隨つて著しく知的である。一種の知的一元論である。其れ故に唯物史觀の反對者は、其の知的なる點を利して、「今若し唯物史觀が眞なりとすれば、隨つて各人が其の方向に何等かの努力を爲す事は無意義では無いか」と反駁する。此の反駁は唯物史觀論者に取り、全く致命的である。然るにボオルは此の難點を免れる一途を見出した。其れは即ちマルクスの知的決定論を動的創造論に翻譯し直ほす事であつた。(2)彼によれば、マルクスの唯物史觀は、本質的には少しも靜的なものでは無く、社會革命の現代樣相の分析に於て、資本主義社會の性質の分析に於て、甚だ動的であつたといふ。其の解釋と批判の當否は今問題にしないとして、兎に角彼の此の解釋は確かに或る新らし味を我々に齎らし得る。

* (1) Creative Revolution, p. 218 (2) op. Cit., pp. 192-93.

種群複合

精神分析學に隨へば、我々の心的要素は、互ひに離れ々々で正しく觀察せられ得るものでは無い。其等の要素は常に網狀に聯合せしめられ、複雜なる體系を構成して居る。此の體系を「複合」と呼ぶ。而して是等の複合は何等かの情緒の周圍に密集して居り、今若し其の體系の或る一の要素を刺戟したとすれば、其の反應として全體系の要素、或は其れの何れかゞ呼び起される。其れは意識の世界へ喚び起されることもあれば、又單に無意識界だけで影響せられて居ることもある。併しとに角此の複合體系が全體的に影響せらるゝ事は注目に値する。此の如き複合に三種の型がある。自我複合 [the ego complex] 種群複合 [the herd complex] 性複合 [the sex complex] が其れだ。主張者の中では此の中の性複合を他のすべての複合以上に勢力の强いものだといふ。或はさうかも知れぬ。併し今の場合に必要なのは種群複合だ。

社會成立の主因と階級的對立

種族複合を考へるから、彼に取つて人間はやはり社會的の動物である。社會を離れた個人なるものは考へられない。此の點で彼はワアドの社會學の或る點には反對する。有名なる社會學者ワアド [Lester F. Ward] によれば、『人間は自然的に社會的動物では無い。』今日人間が示す處の集合的傾向は、單に人爲的の產物だ。卽ち社會生活は有利であるとの人間の理性的信念の產物だ。なほワアドによれば、社會共同社會を形勢する人間の傾向は快樂と苦痛との平衡を合理的に計算しての產物だといふ。併しポオルは此の如き主知的社會學には贊成しない。ワアドは一八四一年に生れた。必然的に彼は其の時代の產物として超主知的傾向を持つたのだ。ポオルは此く批評する。そして社會成立の人間的根基は我々の種群複合であるといふ。(1)

我々は此の點でボオルの社會論とコオル等の其れとの對照を明瞭に見る事が出來る。コオル等によれば、人間の利害心を根基としての所謂聯合體は眞の社會であり、是等の聯合體の全部を包容しての共同社會なるものは、現に明確に存在するものでは無い。ボオルにあつては、此の共同社會に相當す可き、最も廣義の社會連帶は今は存在して居ない。其れはたゞ將來社會の一イデエである。併し社會連帶は、或る一の種群の間では成立して居る。此れはコオルの聯合體に匹敵するものである。現今の社會論は概ねかうした傾向を持つ樣になつた。其れは現今社會學を攻究する人の注意を要する點だらうと思ふ。併し其の小範圍の聯合體又は種群の成立する原因は、彼等兩者の間に相違を持つて居る。コオルは、より知的に人間の利害心を擧げ、其れにルソオの社會契約說の影響を認む可く、ボオルは、より情緒的に、又生物學的に、人間の種群複合を擧げて居る。我々は此の比較によつて何等か敎へらるゝものゝある樣な氣がする。

さて我々のすべての行動が、右の如き種群複合により支配せらるゝとして、種群には部分的種群(the partial head)と一般的種群(the universal herd)とある。併し後者は薄ぼんやりした人間努力を語るだけのものだ。現に存在するものは其の前者である。一方にはブルジョア、他方にはプロレタリアと對立して、是等は其れ々々に異つた種群複合を持つて居る。卽ち其の複合に相應して現出せしめられたものが所謂ブルジョア文化とプロレタリア文化とである。『世界□□を通ほして、プロレタリアは、嘗ていかなる國民的種群とブルジョア種群も到達した事の無い一般的種群になるだらう。自由主義と前マルクス派社會主義の稀薄なる人道的目的の代りに、我々は社會連帶を達成する一の確固たる方法を持つ。』(2)ボオルは斯ういつて居る。

* (1) C. R., p. 204. (2) Proletcult, pp. 132-133.

階級鬪爭とフロイドの心理學、斯樣に竝立して見れば、隨分不思議な對照になる思想も、右の如くにして互ひに結びつけられて居るのである。フロイド一派の心理

學的研究は餘程特色のあるものだ。近來さうした研究は、社會文化のあらゆる方面に加へられ始めた。社會問題との接觸は今後益々有力な研究傾向となる事であらうと思ふ。

マルクス、レエニン其他の影響

最後に、彼に及ぼした重要な思想的要素としては、いふまでも無くマルクスとレエニンの其れがある。或は彼の著全部を通じて、其の思想はたゞマルクスの階級闘爭論、特にレエニン風に解釋せられたマルキシズムの解説だといつてもよい位である。其れ故ボオルには、コオルやペンティー等に見る如き大綱として獨創を見る事は出來ない。大綱はたゞマルクス、たゞレエニンなのである。此れを解釋する樣式に於て、我々はボオルの巧妙なる論理と、其の藝術的なる性格を眺め得るだけだ。併しマルクスに就て彼の論ずる處は割合に少ない。殊に其の引用するものは、多くはマルクスの斷片的小論文のみだ。『資本論』の大著の如きは一度も引用せられて居ない。此く言つても私はボオルの持つマルクス學の知識を疑ふ譯びは無いが、恐らくは彼の長所は、綿密精細に、知的に、經濟活動の過程を分析するところには無いのだらうと思ふ。

レエニンの思想の影響多きことは、其の前著を彼にデディケートしたによつても知れる。否寧ろ其の理論はレエニンの共産主義其のものなのである。近來ロバアト・ウィリアムスは、マルクスとレエニンとを比較し、歴史を概觀するにレエニンは寧ろマルクスよりも大きい樣に見えて居ると公言した。蓋しウィリアムスによれば、マルクスは單に一の理論家であるに過ぎなかつたが、レエニンは一の實行の人だからであるといふ。併しボオルは批評して言ふ。『比較はレエニンを高く見過ぎては居ないが、併し其れはマルクスを低く見過ぎて居る』と。マルクスもレエニンも、其の時代によつて與へられた境遇の中に生きた。マルクスは革命的の思想家なるも、

レエニンの如き「藝術家の自己表現」を見出して、「すべて眞の□□家の藝術的感受性を悅樂すること」は不可能であつた。すべては彼等が持つた歷史的境遇の爲めである。さう言つてポオルは兩者を比較した。(1)

其れ故に彼の思想の體系は、レエニンの階級鬪爭論、革命論、國家論其のまゝである。一々に此れを敍述して行くまでも無い。

是等の思想家の外には、なほ獨逸のラテナウの影響も可成りに多く認められる。現に彼はラテナウの一著を英譯したほどでもある。(2)其他モリスやトルストイの影響も多少は加はつて居る。現代の多くの社會思想も亦有意無意に影響して居る。併し今若し主として彼の思想の構成要素を考へるとすれば、レエニンを中心とし、此れにベルグソンの哲學的根基と、フロイドの心理學的根基とを與へたものが其れであると斷言して大した間違は無からうと思ふ。

* (1) C. R. p. 200. (2) 今年になつてからは、又ロマン・ロランを翻譯して居る。

左翼社會主義者としての彼の態度

ポオルはレエニンの共鳴者なるが故に、其の思想は徹頭徹尾□□的である。そしてレエニンが爲したと同樣に、英國や獨逸の所謂日和見社會主義者、アナキスト、議會主義者等を攻擊して居る。其の點では、彼は英國に盛んなギルド社會主義とは思想的に何等の關係も無い。併し其の目的とする處を見れば、コオルなどゝ同樣に、「產業に於ける自治」を標榜して居る。たゞ此れへ到達する戰術を其れと異らしむるのである。併し彼は、其の戰術の相違こそ最も重要なものだといふ。世には根本の原理や目的は同一だが、たゞ其の戰術を異にするのだといふものがある。此れこそは大いなるまやかし物だ。例へば質と是との相違に於けるが如くだ。量の相違は飽くまでも量の相違であつて、質の相違になる筈は無い。然るに量の是をさへ增加せしむれば、質の相違を來さしむるものがある。戰術も亦其の通りである。『戰術の相

違は、十分に力強いものとなれば、原理の相違になる。』(1)此の批評は確に多分の眞理を持つて居ると私は思ふ。

併し彼も終に一個の英國人である。そして加ふるに一個の詩人である。彼は或る場處では、最左翼としての□□論を爲して居るかと思へば、又他面では其れに或る理性的の制抑を置くものゝ如くでもある。又徹頭徹尾實行を主張するかと思へば、基礎的に教育による改造を尊重するものゝ如くでもある。其れが一方へ徹底して居ないところに、思想家としての彼の面白味もある。

彼は□ザ・ルクセンブルグ女史に同感しては言ふ。『結局彼女は闘爭の爲の訓練を語つては、ベルグソンの立場なる、「生命は行動だ」といふ小點に達した。「民衆は力を使用することによつて、いかに力を使用するかの仕方を學ばねばならぬ。」其れはプロレタリアを理論によつて教育したり、演說をしたり、リイフレットやパンフレットを蒔き散らしたりする問題では無い。「勞働者は、今日、實行の學校に於て學ぶであらう」』(2)斯樣に言つて居るかと思へば、他方では次の樣に議論した。『此の制度に反對しての戰ひに於て、又此れを支持する爲めに使用せらるゝ方法の反對行動に於て、獨立的勞働階級教育、即ち□□的プロレットカルトは、多くの點に於て、すべての手段の中の是もヴァイタルなものだ。』(3)此く言つて彼は白耳義の勞働者教育局長アンリ・ド・マンの言葉を引用した。〔"The Survey", September 1, 1920.〕マンは言ふ。勞働者がストライキを爲した場合に、彼は其の主人に向つて言ふ。私は最早あなたの指圖に從つて勞働しないと。勞働者が自分達の党派に投票した場合に、彼は言ふ。私は最早あなたの指圖に從つて投票はしない。勞働者が自分達の階級と大學とを創り出した場合に、彼は言ふ。私は最早あなたの差圖に從つて考へることをしない。教育への勞働者の要求は、此の三者の中では最も基礎的のものである』と。ボオルは更に此の敍述を實質的に言ひ換へて、進みには三つの方向あり、第一、共產黨の政治的行動、第二、組織せられた勞働者の直接行動、第三、獨立的勞働階級教育、

此れであるとした。勿論此の三者は共に不可缺的に必要のものである。併しボオルは其の著の結末では次の如くに主張した。『勞働者は強い。若しも彼等が壓迫に耐へて居るとすれば、其れは彼が魔醉せしめられて居るからだ。必要なる唯一事は、此の魔醉から彼等を覺ます事である。』(1)此の議論は前の行動第一論といかにして結合せらるゝであらうか。

* (1) C. R., p. 130. (2) C. R., p. 93. (3) P., p. 135. (4) P. p. 140. 此れだけはイタリックで印刷せられて居る。「プロレタルトカルト」の著の結論が其れである。"The workers are strong If they endure oppression, it is fecause they are hypnotised. The one thing needful is to awaken them from this hypnotic sleep."

ボオルは英國社會主義者の左翼、ボリシェーヴィズムの贊成者である。然らば彼は一體、暴力的□□をどの程度にまで認容して居るのであるか。其れを知る事の出來る言葉は次の如くである。『我々に取つてはたゞ一の戰ひ、卽ち勞働の資本に對する戰ひあるのみだ。我々は新らしい、而してより有效なる仕方に於て組織せられたる、勞働者出來得るの限り穩和的なる方法で、我々の目的を追求する。直接行動は必然的に血の雨を喚ぶ事を要しない。たゞ若しも我々が戰はねばならぬ場合に立ち至つたとすれば、エルガトクラシイの到來を高進せしむる爲めに戰ふであらう。』(5)又曰く、『併し我々英國の左翼は、血の雨を降らす□□を求めはしないが、なほ其れが避けられなかつたとすれば、此れを恐るゝものでは無い。』(6)此れによつて見れば、彼の所謂英國の左翼なるものゝ□□論は、コオル等の其れに比較して根本的に立場を異にするものでも無い樣である。此れはボリシェーヴィズム自身の本領であるか。或は英國人一流の性格的穩和策より來つたものであるか。其處に研究の餘地が殘されるであらう。彼の露國革命觀によれば、露國の革命と雖も實は血を見る其れでは無かつた。たゞ資本家の反動が此れを餘義無くせしめ、勞働者は赤衞軍を編成するの止む無きに至つたのだと言つて居る。(7)

＊(ε) C. R., p. 108. (6) op. cit., p. 124. "But we of the British left wing, who do not seek a bloody revolution, yet do not fea rit if bloody it must be:....."(ζ) Morris Hillquit, From Marx to Lenin, 1921, p. 106. 參照。

我々は此のボオルの主張をレエニンの其れと比較する時、其處に多少の相違ある事を思はない譯にはいかぬ。レエニンの態度は、次の言葉によつても、最も明白に示されて居る。"The substitution of a proletarian for the capitalist state is impossible without a violent revolution." Lenin, The State and Revolution, p. 25, ヒルキットはレエニンの此の語を引用したる後、なほ續けて言つて居る。"Bukharin propounds the doctorine that "every revolution means usingforce against the former dominators," and proclaims the slogan: "Overthrow the imperialistic governments by armed upsprings." Zinovieft defines civil war as "a function of the class struggle." " Hilquit, op. cit., pp. 94-95. 彼はなほ幾つかの引用を爲して居るから、詳しく研究する人は同書の前引用頁を讀んで見るがよい。

(2) 其のエルガトクラシイ論

左翼社會主義

以上敍述した處で、ボオルに特有な部分は概ね紹介せられて了つた。『創造的革命』に主張する其の他の部分は、ボリシェヴィズムに常套の議論である事は、前既に述べて置いた通りである。

換言すれば、彼は社會主義者の中のあらゆる右翼派を排斥して左翼派の主張を提出する。或は寧ろ社會主義なる語をすら排斥して、唯一の共産主義なる語を採用する。『「社會主義」は今日桃色である、半ブルジョアである、そしてお上品物である。「共産主義」は赤色である、無産者である、下品である、そしてボリシェーヴィストである。』(1)『右翼社會主義の哲學と傾向とは、實質的に中等階級である。此れに反して、左翼社會主義は根本的に、無産者である。』(2)此の左翼社會主義の立場を主張する爲めには、議會主義のあらゆる形態に反對し、無産者の獨裁を必要だとし、サ

ヴェート制度に贊成して居るのである。

＊（1）C. R., p. 18.（2）op. cit., p. 18.

共產主義者エルガトクラシイ

其の著の順序に隨つて、其の主張の要點を簡單に記述して見よう。

彼は先づ「共產主義者エルガトクラシイ」なる新語を使つて居る。此れはデモクラシイやアリストクラシイやに對する語だ。デモクラシイなる語は、言ふまでも無く、希臘語のデモス〔demos〕及びクラティア〔kratia〕なる語から來た。デモスは「民衆」〔people〕を、クラティアは「支配」を〔rule or government〕を意味する。其れ故にデモクラティアは、「民衆の支配」〔people's rule, or popular government〕を意味するのである。エルガトクラシイは同樣の仕方で拵へ上げられた語だ。エルガテス〔ergates〕は「勞働者」を意味するが故に、エルガトクラティアは、卽ち「勞働者の支配」の意を有する。(1)デモクラシイは今やエルガトクラシイに移らなければならぬ。而して勞働者が支配するのであるから、其處には嚴密な意味に於て「支配」を行ふ、集中的政府がなければならぬ。『無產者の獨裁は他の階級の勢力の代りに一の階級の勢力の交替、ブルジョア寡頭政治の代りに勞働階級支配の交替を包含するが故に、階級が一擧にして廢滅せられた場合には、我々は、我々のより直接の目的を獲得するであらう。我々は獨裁を通ほしてエルガトクラシイに達するであらう。而してエルガトクラシイは、先きに引用した形式を以てパラフレイズするとすれば、勞働者の、勞働者の爲めの、勞働者による、行政〔administration〕を意味するであらう。』(2)〔此處に行政なる語を以て「支配」なる語に換へたのは、マサリック博士の說を採用したのである。「先きに引用した形式」といつたのは、卽ち其のマサリックの說を指す。デモクラシイは「民衆の支配」といふも、近代のデモクラシイは、全く「支配」を目的とせず、「行政」を目的とする。其れ故に彼のリンカアンによつて叫ばれた有名な語は、其の意味にのみ使用せられなければならぬ。此れがマサリックの所說である。」

＊（1）C. R., p. 13.（2）op. cit., p. 15.

ポオルは言つて居る。『デモクラシイに就て語ることを止めよ。君は君をデモクラットだと考へて居るが、さうでは無い。君は君がデモクラシイを欲して居ると考へて居るが、さうでは無い。君はエルガトクラットだ、そして君はエルガトクラシイを欲して居るのだ。デモクラシイは資本主義の長く持ちこたへて來た時代の方法である。そしてデモクラシイはすべて賤しき使用によつて培はれた術語である。デモクラシイを自由派ブルジョアジイと社會主義者の中のラオディシアン〔生ぬるい連中〕に殘し置け。君の目標はエルガトクラシイである。』(3)

＊（3）op. cit., P. 16.

ポオルが「勞働者の支配」なる語の代りに、態々エルガトクラシイなる新語を使用した事は、創造を悦び、想像を尊重する彼の性格の半面を語るものだ。彼は此の外に後に述ぶるプロレットカルトなる新語をも使用する人であるが、其れを使用する理由として、其處では彼の好愛する思想家の一人ラテナウの次の語を引用して居る。新らしい思想は、其れが一の新らしい名稱と聯結せしめられた場合に、我々の精神の上に、より確固たる印象を與へる。』(4)

＊（4）Walter Ratenau, In Days to Come, 1921, p. 247. ラテナウは昨年此の著を自分の手で英譯して出した。Pl, p. 19. 參照

右翼と左翼との相違

ポオルの著『創造的革命』の副名稱が『共產者エルガトクラシイの研究』とある如く、此の著の內容は全然、其のエルガトクラシイの研究に費されて居るが、彼は先づ此の新語の意義と及び無產者の目標とを述べた後、次には次第に議會主義派社會主義の立場を批評し、其の無力を非難した。

社會連帶は彼によつて否定されては居ない。其れは彼がフロイドの種群複合說の

上に立脚するからである。其れは彼が絶對の個人主義の上に立つたアナキズムを否定した所以でもある。併し彼は現在の社會が完全の社會連帶を持つて居るとは斷言して居ない。其處に社會主義は二の分派を生ずる。一は社會連帶による社會主義〔Socialism through the Class Struggle〕である。所謂中間派なるものは存在しない。『實質的に自ら中間派に屬すると考へて居るものは、精神的に又物質的に右翼の子供である。』(1)『右翼は、現在、資本家社會に於て、現に動きつゝある社會連帶が存在すると信じて居る。』(2)然らば左翼派社會主義とはいかなるものであるか。廣義に言へば其の主張者には二つの共通點がある、第一には、議會が最早其の用を爲さぬ樣になつたこと、第二には、勞働者の生長しつゝある經濟力は政治的表現の新樣式を作らねばならぬ事である。(3)

* (1) C. R., p. 29, (2) op. cit., p. 29. (3) op. cit., p. 42.

工場委員制度とサヴェート制度

ボオルは工場委員制度を論じて居るが、其の論結は一部のボリシェーヴィキには寧ろ意外に感ぜらるゝ點だかも知れない。私が此處に工場委員制度と譯したのは、英國でショップ、スチワアド〔shop stewards' committee〕或はウォーカース、コンミッティー、〔workers' committee〕佛國でデレゲ、ド、ラトリエ、〔délégués de l'atelier〕獨國でウェルクシュテッテン、フェルトラウエンメンナア〔Werkstättenvertrauensmänner〕と稱するものゝ事であり、我國では普通に工場委員制度と譯されて居るけれども、其の意義內容共に我國の其れとは雲泥の相違を持つて居る。(1)勞働組合が此の所謂工場委員をいかに見るかは英國でも重要な一問題であつたが、ボオルは此のショップ、スチワアドをサヴェートに比較し、其の意義は□□的のものだとして居る。『ショップ、スチワアド運動は勞働者の□□的意志の現はれである。そして其の□□的意志が急速に□□的狀態を

創造しつゝある手段の一つである。』(2)『運動の直接的目的は、勞働者により、工場に於ける組織を通ほして、産業の支配を確立する事である。』(3)又此の運動は二十世紀の□□の要具であるとも書いてある。

＊ (1) 此の事に關しては、福田博士著『社會運動と勞銀制度』中二一三頁、三三七頁等、堀江博士著『世界の經濟は如何に動くか』三三〇頁等に論じてあり、我國の其れと英國の其れとが比較せられて居る、參照せられるとよい。(2) C. R., p. 72. (3) op. cit., p. 71.

其の他の所説は、ボリシェーヴィズムと何程の相違點をも持たないから、一々敍述の必要も無い樣である。

(3) 其のプロレットカルト論

プロレットカルトとは何か

ポオルの著『プロレットカルト』は僅かに一五〇頁にしか滿たない小著ではあるが、勞働者の敎育を全部的に論じたものとして、甚だよく纏まつた著書であり、此の運動の理論と歷史的敍述とを併せ含み、此の種の書としては近來の小好著だと思ふ。

彼は此處でも亦プロレットカルトなる新語を使用して居る。プロレタリアン、カルチュアの語と同意語なる事はいふまでも無い。彼の所謂カルチュアとは何を意味するかといふに、全體的には獨逸語の所謂クルトゥール卽ち「文化」を意味する如くではあるけれども、併し又其の本來の意味の「敎養」を意味する如くに見える場合もある。彼によればカルチュアはエデュケーション、卽ち「敎育」とも違つて居る。『カルチュアとエデュケーションとは異語同意義では無い。敎育は何等か行動するものである。其れは動力である。カルチュアは屢々動力を指示する爲めに使用せられて居るが、併し其れは亦結果を指示する爲めに使用せられる。敎育がカルチュアを生

むのである。』[Education produses culture.](2)此のカルチュアは亦思想の體系である。卽ち獨逸語にウェルトアンシャウウング、卽ち「世界觀」或は「人生哲學」と呼ばるゝものである。カルチュアは亦シヴィリゼーション、卽ち「文明」とも違つて居る。『カルチュアは此の擴張せられたる意味に於ては、文明の粗材にして、同時に其の最も精妙なる果實である。』(3)

* (1) The Proletcult, p. 23. (2) op. cit., p. 24.

其れ故に私は便宜上、此のカルチュアを其の場合の便宜に隨ひ、或は文化、或は教養、或は教育と譯して記述する事にしよう。

文化には三種の樣相が經過せられた。第一は、アリストクラシイ文化、或は神政的文化であり、第二はデモクラシイ文化である。而して第三のものは、今や我々の文明が其の中に入り込まうとして居るエルガトクラシイ文化である。換言すれば、エルガトクラシイ、或は勞働者の支配の、原因にして同時に結果たるところの文化である。

前二者に就ては詳述しない。第三の『エルガトクラシイ文化はプロレットカルトである。』エルガトクラシイは前述の如く勞働者の支配だ。我々は無產者の獨裁によつて、其處には最早何等プロレタリアたらぬもの無き、エルガトクラシイの、より高き樣相を實現せしむる。『根本的に、エルガトクラシイ文化、勞働者文化、プロレタリア文化、プロレットカルトは戰鬪的文化であり、其の目的とするところは資本主義の□□、エルガトクラシイ文化とプロレタリア觀念によつてのデモクラシイ文化とブルジョア觀念の代替である。』此の階段に於ては、其れは不可避的に一の階級文化である。』(3)

* (3) P., p. 29.

プロレットカルトは一の戰鬪的文化ではあるが、併し其れは□□前と、□□後とによつて、自づから其の方法を異ならしむる道理である。其れは勞農露國のボリシェ

ーヴィキが□□前には、あらゆる方法を以ての資本主義□□機關の□□を計り、□□後には勞働者に檄して産業の組織化を計つたことに對比して見れば、容易に納得の出來ることであらう。勞働組合の如きも亦、□□前と□□後と、其の目的と方法とを異らしめた。プロレタリア教育も同樣にして、既に□□を行つた勞農露國に行はるゝものと、未だ□□の行はれざる他の諸國に行はるゝものとの間に、其の樣式を異らしむる事となつた。レエニンは此の無産者獨裁の彼方には、アナキズムの其れと比較す可き理想的共同社會の視像を描いて居た。□□の死滅とは、其處では□□なる概念を必要としないといふ意味であつた。ポオルに於てもプロレットカルトの究極理想は其處に置かれてある。プロレットカルトが一の戰鬪的文化であるのは、レエニンの無産者國家の時代に相當する。其れ故に彼は□□の行はるゝ順序を次の如くに考へた。方法。政治的範圍に於ける「エルガトクラシイ」。教育的範圍に於ける「前□□的プロレットカルト。」産業的範圍に於ける「間斷無き鬪爭」。結果。資本主義が□□せらるゝまで鬪爭。□□的プロレタリアの獨裁の建設。反□□への强力なる抵抗。後□□的プロレットカルト。結局(唯一可能的なる方法に於て)一の眞に普遍的なる文化[a truely universal culture]へ導く。(4)此の考へは、レエニンの國家論の議論を其のまゝ教育の範圍に於て主張したものだといつてよい。

* (4) P., pp. 49-50.

獨立勞働階級教育と其の方法

プロレットカルト、或は獨立勞働階級教育の特質を考へて見よう。

彼に隨へば、第一に、プロレットカルトは形式的に全然ブルジョアジイから解放せられ、勞働者自身によつて經營せられなければならない。此れが講師たるものも亦、ブルジョア教育によつて毒せられた普通の大學教授などであつてはならない。其の點から、彼のプロレットカルトは、所謂大學擴張運動に反對するものである。

此の議論は、彼が政治論の上に於て議會主義を排斥し、無產者の獨裁を主張し、エルガトクラシイを目標とすると同じ基礎に立つて居る。プロレタリアはプロレタリアだけで自律しなければならぬ。ブルジョアとの混和の中よりは何等プロレタリア的なるものは生れて來ない。彼の所謂アブステンショニズム〔忌避主義とでも譯す可きであらうか。〕は政治の上に於てのみならず、教育の上に於ても同樣に取られたのである。併し勞働者教育が其の經營の上に於てアブステンショニズムを取るは容易な事では無い。從來は此の氣運に向ふに非常の困難を持つた。併し此れまで存在して居た多くの協調的教育設備は、〔其の教育する內容に就て言ふのでは無い。單に形式の上に於ていふのである。〕自然に勞働者をして苦がき經驗を味はしゝめ、勞働者は自分達だけの資力で此の教育を爲さうと欲し、勞働組合が其れの支持を力むる傾向を作り出したのである。

第二に、プロレットカルトの內容は、階級鬪爭の爲めの宣傳的のものになつて居る。勿論此の點に就てはプロレットカルト論者の中にも幾多の異說が立てられた。例へばコオルの如きは、「教育」と「宣傳」との間に區別を立てようとして居る。〔W. E. A. Year Book, 1918, p. 372〕併しボオル等に取つては勞働者教育は□□的教育である。尤も此れには□□前と□□後とを區別しなければならぬ事で、兩者の差違により其の教育內容も自づからなる差違を持つ事である。ウリアノヴァ（レニン夫人）は勞農露國に於けるプロレットカルトの有力なる鬪士であるが、彼女の言ふところを以てすれば、露國に於て『子供達は、其の下に生活せねばならぬ。當該事情に隨つて教育せられなければならぬ。次代の少年子女は社會主義社會の中で生活しなければならぬであらう。隨つて社會主義者教育、社會主義的學校を必要とするのだ』と言つて居る。

第三には、其の教育の方法は甚だ自由的なるものであつて、現今の機械的注入的の反對である。此れには彼のモンテッソリ女史の思想などの影響がある。併しボオルは寧ろ此の自由教育の根基を例のフロイド派心理學の上に置いたのは興味深い。

フロイド等に隨へば我々の意識の中の甚だ重要な部分は潛在意識要素だ。教育は此の潛在意識に影響を加ふるものでなければいかぬ。然るに其れを爲すものはたゞ暗示作用のみである。彼の自由教育は此くして一の暗示教育になつた。行動の原動力は想像の力である。教育は暗示である。暗示を及ぼす時に役立つものは意志では無くて想像だ。其れ故に我々はゲエテのファウストの『始めに行爲ありき』といふ語を『始めに想像ありき』と訂正しなければならぬ。行爲は此の想像に繼起する。プロレタカルチュリストは、想像が自らを行動に實現するまで、想像に點火しなければならぬ。ボオルの自由教育論の基礎は右の如くにして築き上げられて居る。

なほ此の勞働者教育の概況に就いては、ボオルの記述するところあるも、今は其の所説の骨組を示すだけに止めようと思ふ。

階級自由教育の新潮流

一　階級自由教育の運動

いかなる大いなる變化と雖も近來の社會思想の變化ほど著しいものは他にあるまいと思ひます。社會事實自身が、此の數年の間に、數世紀にも匹敵する大變化を來して居りますから、其れに關しての思想の變化の著しいのは別に不思議な事ではありまい。經濟學上、其れも社會主義の經濟學上重要な言葉であつてブルジョアとプロレタリアなる語は、今では經濟問題ならぬ、あらゆる文化の上に適用せられて居る。そして他の如何なる言葉よりも強く、我々の日常生活に關しての思想を支配して居るのであります。

最近に我國の文壇は、文壇の階級闘爭の問題で實に喧しい論議を取交はして居る。文藝にブルショア文藝とプロレタリア文藝との區別をして、苟しくも我々の取る可き文藝は其の後者でなければならぬとし、前者の廢滅を期して居る一派があるかと思ふと、他には又、藝術には階級無し、其れはたゞ人間性を表現するものだと論ずる一派があります。前の主張者は文壇の左翼であり、後のは其れの右翼である。かうした議論が取交はされる處を見ると、文壇も隨分進んだものである。今では其の所謂プロレタリア文藝といふものが幾つも文壇に提供せられ、其の一派の雜誌が幾つか出て居るのであります。

併し今若しかうした新潮流が藝術の方面で現はれる何等かの理由があつたとすれば、其れと同じい事が教育界と宗教界には何故起らないのであるか。我國では未だ容易に其の芽生へさへ出來さうにない處を見ると、私は實に不思議でたまらない。宗教は先づ論外とする。教育界では、今や他の諸外國では、我々の文壇に於けると全く同じい性質の問題が起つて、其れが盛んに論議せられて居るのであります。卽ち其れは現在の教育を目して一のブルジョア教育であるとし、我々の教育は形式內容共に完全なるプロレタリア教育でなければならぬとする新潮流であります。プロレタリア教育は先づ形式的にブルジョアジイから解放せられようとする點で自由教育である。次に其の內容とも見る可き教育の方法の上で實に徹底的に現代の機械的なる、詰込み主義的なる教育に反對して居る。其の點でも亦新らしい一の自由教育であるといつてよい。例へば此の一の自由教育、卽ち此れを階級自由教育といつて最も適當なる一潮流の全般に就て、巧みに完結した敍述を試みたボオル氏夫妻が、其の著の中で引用して居る多くの言葉によつても、此の教育の特色は知られて居る。ヨゼフ・ジューベールは、『精神の方向は、精神の進歩よりもより重要なものだ』といつて居る。又シャルル・ボードゥインは、「教育の主なる仕事の一つは、害毒ある暗示から子供を庇つてやる事だ。すべての暗示から子供を取り離す事は全く不可能である。

暗示は常態(ノルマル)であり、又必然的である。否寧ろ全體としての教育は暗示の外の何物でも無いのだ』といつて居る。此等によつて階級自由教育のいかなるものなるかは略ぼ知られ得るのであります。

二　プロレットカルトの意義

ボオルは此の階級自由教育に特にプロレットカルト(Proletcult)なる名稱を與へて居る。ボオルは一體新語を使用することの好きな人の樣である。此の著の前に、(一昨年)出じた名著、屢々多くの思想家によつて引用せられた暗示的な著書、『創造的革命』に於ても、(此の著を讀まなければボオルの後の著の趣旨はよく分らない)エルガトクラシイなる新語を使つて、アリストクラシイ、デモクラシイと竝用して居る。何故さうした新語を使用したかといふに、ボオルの意味する樣な教育は、「プロレタリア文化」或は、「獨立的勞働階級教育」の語によつて現はされるが、此れでもなほ彼の要求するところのものを、生々した感激を以て現はす事は出來ない。そこで彼は此の間暗殺せられた有名な獨逸の哲人政治家ワルテル・ラテナウの言葉を引用した。ラテナウはいふのである。『新思想は其れが新らしい言葉と關係せしめられた時に、精神の上に、より確固たる印象を與へるものである』と。(ボオルにはラテナウの影響が可成りに多い。現に彼はラテナウの書を英譯して居る。)

併しプロレットカルトといつた時には、ボオルによつては、單に教育だけが意味せられずに、寧ろより廣汎なる文化一般が意味せられて居ると見てもよい。彼は言つて居る。英語のカルチュアなる語は「教育」なる語と同意語では無い。教育は一の働きである。一の動因である。カルチュアは此の動因を示す場合もあるが、併し其れは亦結果を示す時に使用せられて居る。教育がカルチュアを生むのである。其れ故にカルチュアは此れを獨逸語で現はせば多くの思想の體系、卽ち「世界觀」だといつてもよい。又カルチュアを「文明」なる語と比較しては、カルチュアは廣義に於て

は文明の素材にして同時に其の最も精美なる果實であるとも言つて居ります。

カルチュアの發達には三つの段階があつた。第一は貴族的神政的、第二はデモクラティック、第三はエルガトクラティックであります。エルガトクラシイといふのが一新語であつて、此れが「勞働者の支配」を意味して居る。其のエルガトクラシイのカルチュア、換言すれば勞働者の支配するカルチュア、プロレタリアン、カルチュアを「プロレットカルト」と呼んだのであります。

三　プロレットカルトの起原

階級自由教育は實際運動として可成り前からあつた。勿論大戰前に其の形が出來て居たのであります。此の教育が勞働者によつて強く意識せられる前には、所謂大學擴張運動だとか、（此の名は一八五〇年に始めて出來た）諸種の慈善的、社會政策的團體による勞働者教育などによつて、略ぼ其れらしい教育は成立して居たのであります、併しよく考へて見れば、其れは何等プロレットカルトの性質を持つたものでは無い。勞働者はカルチュアの性質を全然ブルジョアジイの其れと異らしめやうとするのですから、此んな中途半端のもので滿足出來る筈がない。言はゞ此の教育は勞資協調的のものである。其れに對して彼等は、形式内容共に全然勞働者自身の手でやつて行く眞の獨立的勞働階級教育を熱望した。其の結果として、彼等は甚だ苦しい經驗を嘗めて、終に多くのプロレットカルト設備を作る事が出來たのであります。勞働大學なる名稱を持つた學校が幾つも出來た。最近には其等が全然の勞働者自治によつて經營せられて行くのは一の壯觀である。其の突き詰めたところでは、ボグダノフの如きは、プロレタリアはプロタリアの立場に立つた百科全書を持たなければならぬとさへ主張して其の仕事をやつて居る。非常に變化した趨勢といはなければならぬ。一昨年十月開かれた勞働者教育勞働組合協議で議長のアーサア・バッフが爲した演說などを見ると、極力大學擴張教育の惡を攻擊して居るのであり

ます。併し今は此の運動の事實的叙述を一切省略して其の理論的方面だけを述べて見ようと思ふ。

階級自由教育の考への近代的起原は相變らず、ルソオにある事と私は思つて居ます。ルソオは實に偉大な思想家であつた。近來社會思想の方面でいろ〳〵の新らしい考へが成熟して來ましたが、よく調べて見ると其の根本の考へは皆んなルソオの思想の中にあつたので驚いて了ふ。デライスル・バアンズが最近に其の事を注意して居ります。露西亞では「働かざるものは食ふ可からず」といふ事を民衆のモットオに致して居りますが、其の根本の考へはやはりルソオにある。しかも『エミイル』の中にある。其れでは仕事をしないで怠けながら食つて居る人間は盗賊だと書いてあります。恐らくは、從來『エミイル』を讀んだ教育學者は其れに多くの注意を拂はなかつたかも知れないが、併しバアンズは流石に其の烱眼から、此の點に注意して、其れと露西亞の政策とを比較したのであります。して見ますとルソオは、此れほど勞働の意義を重要視して居るのであります。あの『エミイル』の中で書かれて居た教育は、單なる自由教育だけでは無く、ブルジョアジイの教育からの解放であつたらうと思ふ。私はもう一度さうした着眼を置いて『エミイル』を研究して見たい。今は其れだけの準備が出來て居ないから、確固とした事を言ふ資格が無い。

四　プロレットカルトの主張者及び其の見解

先づ明瞭に階級自由教育の考へを唱へ出したものとしては、西班牙のフランシスコ・フェルラア(1854-1909)の名を擧げなければならぬ。彼は哲學的アナキストであり。遺憾ながら一九〇九年十月十二日、バーセロナで死刑に處せられて了つたので、其の意見は餘り多く聞かれなかつた。併し其の遺稿は燦然たる光を放つて居るのであります。『近代の學校の起原と目的』なる名著が英譯せられました。彼の考へは、今ポオルなどが主張して居るプロレットカルトの考へと全然同一のものである。眞

に自由なる教育は、宗教的物語や、不可避的なる社會經濟的不平等への服從のすべての思想から解放せられる事であると論じた。ブルジョアジイは其の現在の地位を維持せんが爲に、教育に於て絶えず其の事を鼓吹し、兒童の意識をブルジョア的に作り上げて了ふ樣に努力して居る。其れ故に現在の民衆は、よしプロレタリアであつても眞のプロレタリアである判斷を持つて居ない。此れを防ぐ爲めには、いかにしても現在の教育を打破し、勞働者自身による教育を始め、形式内容共にプロレタリア的なる教育を施さなければならぬ。フェルラアは斯樣に論じたのでありますが、現在の如き時勢を見ない以前に此れを論じ出して居た彼の卓見は恐る可きものであつたと言はなければならない。

フェルラアに次いで述べなければならぬのは、佛國のサンディカリスト、例へばペルト、ペルチエ、ラガルデル等の階級自由教育でありますが、其れは今省略して置きます。たゞペルトが、『社會主義者運動は、本質的にプロレタリア教育の運動である、社會教育の運動である』といつた事に注意を喚起して置きます。

露西亞の階級自由教育論者の考を少しく紹介致して置きます。此の人達の中には、ルナチャルスキイ、(文相)ウリアノヴァ、(レニン夫人)ポリアンスキイ、ボグダノフ等の名が大事のものになつて居る。ルナチャルスキイはどつちかといふと割合に穩和な人である。勞農政府の首腦者の中では、舊文化の夢を離れないで居る人といつても宜しい。其れ故に階級自由教育の性質を其れほど强く鬪爭的のものとは見て居ない樣なところもあります。ウリアノヴァ夫人は、『露國では兒童は彼等が生活せねばならぬ事情の下に教育せられなければならぬ。そして此等の兒童達は社會主義社會の中に生活するのだ。隨つて社會主義教育を受け、社會主義學校で學ばなければならぬ』と言つて居ります。ポリアンスキイは、『民衆は小ブルジョア及アナキックの情操によつて染められて居た。彼等の精神は、資本主義的ブルジョア文化によつて毒せられて居た。此の毒への唯一の解毒劑は、獨立した、嚴格に勞働者階級の文

化である。プロレタリアの文化的獨立、此れが我々の標語である』と言つて、プロレットカルトの意義を重視して居るのであります。

ボグダノフは餘程偉い人物である。此れはプロレットカルトの理論を堂々と體系づけて論じた人である。抑も學問の目的からして論じ出して居ますが、其れではプラグマティックの考へを取つて居ります。其の後で教育と露國の勞働階級との關係を論じて居ますけれども、此れは一言では述べ悉す譯には行きません。

五　プロレットカルトの特質

甚だ簡單に階級自由教育の特質を申して見ませう。

階級自由教育は、第一に、明かに階級鬪爭の目的を持つて居る。ブルジョアジイの社會にあつては、其のブルジョア文化と鬪爭するのであります。卽ち一の社會主義の宣傳教育の樣なものである。此れは主張者によつて多少づゝ意見の相違を來す點である。私の甚だ親しさを感じて居るコオルなどになると、宣傳と教育とを區別しますが、併しボオルなどは區別を認めようとしない。其れから露國の樣に無產者の獨裁の行はるゝ社會では、階級自由教育も亦獨裁的色彩を持つ。完全にブルジョアジイの排斥せられた社會では、階級自由教育が、直ちに、普通の教育なるものである。斯樣に考へて居る樣であつて、其れは始ど全くレエニンの國家論の考へに平行して居るのであります。

併しかうした教育を一寸我々が考へると、「其れは隨分偏つたものだ、殊に社會主義の宣傳教育の樣な事をするのは、不屆至極だ、一般に人間の正しい理性や道德心やを涵養する樣に教育しなければならぬのでばないか」といひたくなるでありませう。併し彼等主張者は其れに對し猛然として反對する。さう言つて教育して居る現在の教育が、實は少しも正しい理性や道德を教へないで、ブルジョア本位の理性や道德を教へて居るでは無いかといふのであります。近來ルトゲルスの書いた論文な

どを讀んで見ると、彼等とてもブルジョアやプロレタリアの區別を超越した文化一般なるものを認めないのでは無い。否寧ろ大いに其れを認めて居るのである。さうした立派な文化一般を生み出したいからブルジョア本位の文化を排斥するのだ、と論じて居るのであります。其の點はいかにもと納得出來る點がある。

後はもう簡單に申します。第二には彼等はあらゆるブルジョアの手から離れ、勞働者自身の手によつて經營せらるゝ學校教育を持たうと主張して居る。此れは近來の產業自治の要求と同じ事で當然である。前にも言つた樣に大學擴張教育などを冷笑して居るのであります。

第三には、社會の改造は、根本的には教育によらなければだめだと考へて居る。社會□□は實は文化□□だと考へて居るのであります。此の點では、彼等の考へは、我國の社會主義者の其れとは大いに違つて居る。勿論此の考への方が徹底的だと私は考へて居ります。

第四には、其の教育方法は、徹頭徹尾自由的である。モンテッソリの方法などに大分影響せられて居る樣であります。そして彼のジェネヴァのジャン・ジャック・ルソオ研究所のアドルフ・フェルリエールの言葉などを引用致して居ります。『何れかの時に、世界は國民の社會の代りに、人間の聯合を作るに相違ない。其の時世界には最早軍費豫算なるものが無くなつて、唯だ一つの莫大なる豫算があるだらう。其れは教育の豫算だ』とフェリエールは言つたのでありますが、今や階級自由教育論者も其の目的と方法とを追つて居る。此處に興味ある事は、ボオルが其の教育方法理論に早速近來甚だ有名となつて居るかの新心理學、フロイドの精神分析學を應用し、其の上に方法理論を建てゝ居る事であります。其れ故彼は主知教育を排斥し、寧ろ潛在意識への暗示教育を重視して居る。教育とは彼に取て全く暗示の教育に外ならぬのであります。隨つて我々の想像を何よりも尊重する。教育は意志教育では無くて想像教育になつて居るのであります。ボオルは『始めに想像ありき』と我々は言ふ

べきだと論じて居ります。さういふところは、此の思潮がサンディカリストの中で養はれて來た事にも大關係がありませう。サンディカリストは主知的運動を排斥して「神話」などいふ事を申して居ります。其の神話と、プロレットカルチュリストの想像とは甚だ類似した概念だと私は考へて居ります。

六　プロレットカルトの批判

制限以上に長く書いたから、批判はほんの一言で濟ませて置くより外に仕方が無い。

私は先づ第一に階級自由教育の考へは非常に多くの眞理を含んで居ると考へる。そして今後の教育界に有力なる潮流の一つとなつて我々の前に現はれるものに相違無いと信じて居る。其れがどうも不審だと考へられる人があつて、此れを批評するに相變らず持ち合せの標準を以てすると致しますれば、私は其の人にもつと現在の社會思想を研究して欲しいと希望するより外は無い。此の教育は從來の教育學の埒外に出た問題を構成して居るのであります。

次には教育制度の上に於て此の思潮は、今後に大影響を及ぼす事と思ふ。所謂社會教育といつてやつて居たどつち附かずのものゝ考ふ可き時が來たのであります。

教育内容の上に於て大いなる反省を我々に與へる。我々の教育は確かにブルジョア的特質を帶び過ぎて居た。英雄主義、名譽心、所有欲、慈善服從等の諸方面で我々は從來如何に多くのブルジョア心理を保持して居たであらうか。此等は冷靜に批判せられて行かなければならない。

其他數へ上げて居ると其の重要意義は幾つもありますが、併し同時に缺點をも澤山に持つて居る。第一に學問や教育の目的をプラグマティックに見るのは贊成出來ない。それからプロレタリア概念と文化概念との關係に就て間違ひの無い理解が欲しい。此れを突き詰めて言へば、教育が社會主義的に行はれるのは正しく無い。も

う一つ言ひ換へれば、社會主義は正しく無い。我々は理想主義を取らなければならぬ。其の理想主義の基礎に立つてプロレットカルトの方法が行はれなければならぬ。かういふ事になる。併し此れはもう所謂教育學の問題から外れますし、又今簡單に議論をする譯にもいかない。其れ故此れで全篇の紹介並びに批判を終らうと思ひます。併し最後に、かうした問題を論じて居れば、終極には所謂教育學の埒外に出るのは甚だ意味深い事では無いかといふ事を一言申し殘して置いて、讀者の御一考を煩はさうと思ひます。　（「創造」大正十一年八月）

＊此の論文は全然ボオル夫妻の新著「プロレットカルト」に隨つて書かれたものである。其の公表せられたのは『創造』大正十一年八月號の誌上に於てゞあつた。然るに其れが、我國に於ては最初にプロレットカルト論の主張せられたものとなつた。論文の書き方には杜撰な點もあるが、其の歴史的意義の上から、此處に輯錄する。原文には「小序」があり、各國に於ける現在のプロレットカルト論者の名稱などを擧げて置いたが、此の轉載には其の「小序」を省略した。同年九月には、『文化』誌上に私がボオルの社會思想全部を所説し、雜誌『種蒔く人』は、其の全誌を擧げてプロレットカルト號とした。然るに『種蒔く人』は發賣禁止となり、『文化』の所説だけが世に紹介せられた。其れから約半年を經過して、プロレットカルトなる語は、社會評論家の間に重要な論題となり、最後に教育雜誌が其の標題を掲げることゝなつた。

勞働者教育國際會議

『文化』九月號（大正十一年）にプロレットカルトの事を書いて置いた。此の八月に其のプロレットカルトの國際會議が開かれたから、其の狀況の概略を書いて置く。

一九二二年八月は勞働者教育の歷史に取つて忘る可からざる月となつた。白耳義勞働者中央教育委員會の招待により八月十六—十七日に勞働者教育の國際會議の、眞の意味に於ての第一回が開かれた。開會地はブラッセルであつた。

英國で送つた勞働者教育の各機關の名稱を見ると、ポオルが其の著の中で論評して居たすべての勞働者教育機關を悉くして居る。The Labour Colledge, London, Ruskin Colledge, the National Council of Labour Colledge, the W. E. A., [the Workers' Educational Association の略] the Workers' Educational Trade Union Committee, the Co-operative Union, Trade Union, Congress General Council の代表者は皆な出席した。代表者を送つた國は、獨逸、白耳義、佛國、米國、瑞西、丁抹、チェッコ、スロヴァッキア、ルクセンブルグ、和蘭、墺國であり、アムステルダム勞働組合インタナショナルも代表者を送つた。

第一日は多く其處へ代表員を送つた諸團體の報告を聞くことであつた。併し其等の報告によつて見れば、一九一三年の會議以來、甚だ顯著なる進歩が、勞働者教育に見られて居る。

其の中でも最も高い程度に組織立てられて居るのは白耳義の勞働者教育運動である。此れは產業的、政治的及びコオペンエション運動が合同して其れを支持するからである。此れは國內全部を擧げての勞働者を、其の閑暇の時に教育しようとする企畫である。

白耳義の教育團體はマルクス主義の上に立つて居た。併し其の外にも、此處へ代表者を送つた團體は概ねマルクス派へ屬して居た。

國際勞働者教育精神の生長を刺戟することの必要に關して長い討論が行はれた。其の結果勞働者大學に其の學生教師及び教科書を交換を勸めることを決定した。

會議の中で最も多くの議論の持ち上つたのは第二日である。此の日會議は勞働者教育の目的を決議しようと欲した。提出せられた議案には、「勞働者の知的及び教養的教育」〔intellectual and cultural education of the workers〕及び「勞働階級の經濟的及び政治的進歩」とあつた。此れには、勞働大學國民局及び倫敦勞働大學が猛烈に反對した。其れはロイド・ジョージでさへも容易に贊成する言葉であるとした。

結局決議では勞働者教育の目的をば、「勞働階級の解放」〔the emancipation of the working classes〕であるといふことに修正して議決した。其の爲めに會議は國民的及び國際的勞働團體に訴へようといふのである。

我國の勞働者教育機關も亦將來必らず此の國際會議へ代表者を送るに至ることだらうと私は信ずる。（「文化」大正十一年十一月）

第三編　プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題批判

プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題

(1)　文化とは何か

プロレットカルト

『文化』昨年〔大正十一年〕の九月號〔第四卷第四號〕に、私はポオル氏の『プロレットカルト』といふ一書の內容を紹介して置いた。〔此の書の內容を紹介した私の論文は其れが其の最初の

ものでは無い」プロレットカルトとは、何を意味する言葉であるか。とに角普通の辭書の中には、かうした言葉は掲げられて居ない。其の語は要するにプロレタリアン、カルチュアなる二語に要約したものである。ところが英語のカルチュアは、常に飜譯に困難なる言葉であり、「教化」、「教養」、「教育」等を意味する樣でもあれば、又獨逸語のクルトゥール、卽ち「文化」を意味する樣でもある。ポオルが其の著に使用したところを見るも、其の意味は此等の何れにも通用せられて居る。(彼は「カルチュアとエデューケーションとは異語同意義では無い」と書いては居るが)けれども其の實質を見る時には、カルチュアは「教化」と飜譯せられるが、適當かと思ふ。若し「教育」といふ語を、割合に狹義に解し、學校や社會に於て、確然たる手段と、及び意識せられたる目的とを以て爲さるゝ其の教育と解し、「教化」は其れよりも一層廣義の、包括的の、且つ漠然たる意義のものと解するならば、稍々適當して居るかと思はれる。此の論文にあつては、私はプロレットカルトとカルチュアを主として右の意味に使用して行かう。

プロレットカルトは今や我國の思想界にあつて可成りに重要な論題となりつゝ居る。現にポオルの此の著は近々に邦譯せられるさうであるし、雜誌『早稻田文學』には二月も三月〔大正十二年〕も其れを論題とした論文が多く掲載せられ、他の雜誌の上にも同樣性質のものが掲載せられた。或る人達は直ちに其の實際運動の準備にかゝつたといふ噂さも傳つて居る。私は既に『東京朝日』紙上に『プロレットカルト運動』といふ一文を掲げて私の立場を公開して置いたが、此の問題は重大なものであるから、今の機會にもつと根本の問題から考察を始めた評論を書いて置かうと思ふ。本論は卽ち其れである。

プロレタリア文化の問題

プロレットカルトを「無產者教化」と翻譯するならば、其れを論ずる前に我々は、

獨逸語のクルトゥールの意味に使はれて、「プロレタリア文化」其のものゝ問題を解決して置かなければならない。ポオル氏はカルチュアを亦思想の體系であると解し、獨逸語の「世界觀」又は「人生哲學」と呼ばるゝものと同じものだと書いて居るから、プロレタリア文化は當然プロレットカルトであり、此の二問題を區別することは、言葉として滑稽なものであらう。併し我國に於ては、プロレットカルトの問題以前にプロレタリア文化の問題は既に熱心に議論せられて居た。例へば「プロレタリア藝術」の問題が其れである。プロレタリア藝術の問題は、私自身としては、既に完全に解決せられて居る問題であるとは思ふが、併し我が思想界にあつては、今年も現に評論壇の中心題目の一つとなり、少しも其の解決點に到達して居ない。其れ故私は先づ一般にプロレタリア文化の問題を論じ、私の正しいと考へて居る解決を其れに與へ、然る後に新らたに問題となつたプロレットカルトを考察して見よう。

文化と個性概念

日常の會話の間に「文化」なる語を我々が使用するとすれば、一體其れは何を意味するか。私は先づ其の語に就いて考へ得られるだけの概念內容の性質を分析して見なければならぬ。

(1)　我々は「文化」なる語を、奈良朝文化、江戸文化、民衆文化、貴族文化、ブルジョア文化、プロレタリア文化といつた風にして使用する。單に「文化」といつて使用する場合は、殆ど全く無い。〔文章の上ではさう書いて居ることがあるにしても〕斯樣に一の形容語を附して〻無ければ、――單なる概念としてのものはいざ知らず、――具象的の所謂文化は意味せられ得ないといふは何故であるか。人はすべて、「文化」は何等かの個性を持つと豫定するが爲めであらう。奈良朝文化と江戸文化との間には、其の文化の個性の上に全然の相違がある。民衆文化と貴族文化との間にも

亦同様のことがあらう。其の所謂個性は、他の概念的の言葉を以て、何等其の特徴を表示し得ないものでは無いかも知れない。例へば奈良朝文化を語るに、其れは華嚴教的であり、中央集權的であり、多元論的一元論の特質を含むといふ風にして其れを表示することは出來るかも知れない。其れを聞いて、我々も亦略ぼ奈良朝文化の特色を知る事が出來る。けれども逆に是等の概念的特質を結び合せて、其れで奈良朝文化は出來上るであらうかといふに、其れは勿論肯定せられ得ない。奈良朝文化は、とに角生きて動いた奈良朝文化であり、其の持つた個性も亦生きて動いた文化の個性だ。いかに精密に概念的決定を爲し、其の決定を結びつけたところで、もとのまゝの個性建築は出來上らない。現實した個性は、其等の概念によつてはどうしても表示し得られない或る特質を持つのである。そして我々が「文化」をいふ時には、さうした絶對の意味の個性を其れに豫定して居る。ブルジョア文化とプロレタリア文化とを對せしめたとすれば、プロレタリア文化の主張者は、從來のブルジョア文化の中には全然含まれて居なかつた或る絶對の個性を、其れの上に認識しようとする。個性は文化概念に必らず含まれる一要素だ。

文化と普遍妥當性

(2)　併し單に個性を持つが故に獨立の一文化だとは言はれ得ない。例へば今一人の畫家ありて、他の畫家と全く個性の異つた繪畫を製作して居たとしても、其の作品を呼ぶに此の作家の姓名を以てし、「A氏文化」とは呼ばないであらう。其の個性は單なる氣紛れであるかも知れない。或は又何等の藝術的價値をも擔つて居ないものかも知れない。さうした場合には、我々は其れを個性だとさへ呼ばない。個性とは、單に「他と違つて居る」といふ意味では無い。個性的なる藝術的作品ほ、よく此れを鑑賞すれば、其の中に何等か永遠的なる、且つ何等か全人類的なるものを發見し得る。例へば我々が奈良朝時代の彫刻を鑑賞し、長く其の作品の中に沈潛して居れ

ば、其れは全く他と違つた、眞に生々とした個性を持つては居るが、同時に其の個性は、神的人格、――「神格」とでも呼ぶ可き永遠のものに嚴然と結び付いて居ることを知る。そして此の如き神格を具現しない作品は、個性としても亦完全なものでは無い。個性が具體的となり、生氣を帶びしめられゝば帶びしめらるゝ程、其れに內在する永遠的なるものゝ永遠性は確實となり、其のものが我々にせまつて來る人格力は大きく、はつきりして來るのである。ドストイ「ェフスキイの作品『カラマアゾフの兄弟』を讀めば、其の中へ出て來る三人の人格が其れ々々餘りに强い個性を持ち、我々は其の個性の現實性を信ぜざるを得ないが、併し同時に我々は其の兄弟の何れ一人でもを憎むことが出來ない。其の個性は何等かの神格と關係する。道德的に彼等の性格や行爲を非難することは出來るが、併し其の非難は何と無く表面的だといふ感じがする。我々は此の性格の背景に、實現の力となつて內在する神格を否定し得ず、其れへの沈潛によつて何等か宗教的の敬虔心を與へられるからである。

此の如くにして私は文化が眞に個性的なる場合には、同時に文化は永遠的なる特性を持つて居ると信ずる。個々の氣紛れ的なものには、綜合的に「文化」といふ名は與へられないで、人類の永遠性に關與するところあるものにのみ、此の名は與へられて居る。文化は、其の中に、人類の永遠性が個性的に內在したものだ。文化は普遍性を持たないかも知れない。併し文化なる限り、當然に普遍妥當性を持たなければならない。

文化と歷史との關係

(3) 奈良朝文化、江戶文化といふは明確に理解せられ得る。理解せられ得るとは、其れの個性と我々は明確に觸れ合ひ得る事をいふのだ。然るにブルジョア文化、プロレタリア文化といふは、其れと同じ程度の明確さを以て、我々に理解せられ得る

であらうか。奈良朝文化、江戸文化といつた時には、其のものはいかにも文化としての現實性を感ずるを得たが、ブルジョア文化、プロレタリア文化の場合には、其れだけの現實性を持たず、我々には單なる概念として響いて來る傾向を持ち易い。同じ事を言ふに過ぎないが、奈良朝文化にあつては、其の個性はいかにも高い程度の具象性を持つに反して、プロレタリア文化にあつては、其の具象性乏しく、此れが特性を概念的に列擧し得るに止まる。共產主義的文化、アナキズム的文化など言つた時には、最早其の個性を明確なる直觀性を以て描き出すことが出來ない。右のことは一體何を意味するか。文化は歷史の中に現はれるといふ事だと私は思ふ。卽ち奈良朝文化、江戸文化といふは、眞に歷史の中に具現した文化なるが故に、我々は其の個性へ直感的に接觸することが出來るのであり、共產主義的文化、プロレタリア文化などいふは、或は歷史の中に全く具現せられないが、或は今當に具現せられんとする經過中にあり、乏しい歷史的現實性をしか持たないから、其れを直感的に再現する事が不可能なのである。此くして眞に具象的、眞に個性的なるものは、歷史の中にだけ現はれて來る。歷史的文化は、いかなる概念によつても完全に此れを表示し得ない精緻なる個性を持つが、其のことは直ちに歷史的現實性をして、「繰り返し」の無いものにさせる。人間の歷史は眞に個性的なる連續的發展であり、其の上に現實性の繰り返しが無い。文化は其の「繰り返し」の無い歷史的現實性を離れては全く考へ得られない。

文化と自然との關係

(4)　文化は自然物との交涉によつて起る。其れは抑々クルトゥールなる語の語原の中に含められた意味である。私は今私の前に或る農用耕作地を眺めて居るが、其れが農用耕作地として、經濟的財として、考へられる限りには、一の「文化」であるが、此れを或は植物學的に、又或は化學的に研究しようとすれば、其處には單に自然物

としての見方だけが殘つて、文化としての見方は消失する。併し其れへは、人力が加へられて居るから文化となつたのであるか。文化とは一の見方であつて、一の物質的結果では無い。我々は此のものが、人力の結果成起したと考へる事をしない。人力は寧ろ其のものゝ見方に於て必要なのだ。言ひ換へれば、我々の人間的見方が、「文化」であることに必要の要素である。併し其の人間的見方とは、我々の欲望が其れを利用し得るとの實用的見方を意味するか。決してさうでは無く、實用的見方はたゞ其の文化的見方の中の一種類にしか過ぎない。そして實用的見方は、なほ其の根本に或る人格的見方を潜めしめる。文化とは人格が自然物と交渉して成立した一の見方だ。人格が其の見方を自然物に就き創造したのである。其れ故に素材として の自然物を離れて文化は無い。自然物其のものが、結局文化なるが故である。併し自然物のみであつて、其れに人格的見方が加らないとすれば、勿論文化なるものは無い。文化を創造する「人格」は、個々人によつて相違する、單に經濟的なるものを意味し得ない。蓋し文化は神格とも呼ばる可き或る永遠的のものに關係すると言つて置いたが、今の場合人格とは、言はば其の神格を意味する。個々人に内在して、勿論經驗的なる人格ではあるが、併し單に經驗的では無く、其れに何等か永遠的なる、超經驗的なる要素を含むのである。我々が人格といふ場合は、此くして常に超經驗的なる實在を意味する。文化は超經驗的なる人格の自由なる創造であり、隨つて其は超經驗的であり、普遍妥當的である。

「文化」の哲學的意味

苟くも其れが「文化」と呼ばるゝものなる限りには、ブルジョア文化なるとプロレタリア文化なるとを問はず、右に擧げた特質を持つものと考へなければならない。然るに文化に關して爲された我國の評論を顧れば、其の多くの場合に、右の特質の何れか一つを高潮して、他の特質を排したものになつて居たと私は思ふ。プロレタ

リア文藝の問題が、今に至るもなほ其の解決の究極に達し得ない理由は亦其處にあらう。其れ故私は、我々が使用して居る「文化」なる語の普通の意味を豫め右の如くに分析して置いたのである。

私は次に右の特質を、多少哲學的に言ひ換へて見たい。但し順序は前のものと違つて來る。

右の哲學的なる言ひ換へ

(1) 文化は、自然に對して、人格の創造した見方である。其れ故私は、文化は概念を以て自然概念に對したものとする。自然は我々の人格的見方を離れて居る。(1)然るに文化は、我々の人格的見方を離れることが出來ない。此の場合の所謂人格は、言ふまでも無く、經驗的人格を意味せず、超經驗的人格を指す。

*(1) 勿論徹底した意味に於ては、「自然」も亦人格の創造した見方であるといふことが出來る。リッケルトも亦其れを問題にした。併し此くして我々の認識對象の形式はすべて其れを認識する認識主觀としての人格を離れて其の意味の無いものであるとすれば、此く構成せられたる自然の上に、もう一度人格的見方の加はつたものが文化であるといへばよい。

(2) 文化は普遍妥當的價値を存在世界の中に內在せしめたものである。文化が文化としての意義を持ち得るは、全く其れに內在する普遍妥當的價値が意義を持つて居るからである。隨つて文化は二面から考察せられ得る。しばらく其れに內在する價値を顧慮しないで、其れの存在性にのみ注意する見方が其の一、しばらく其れの存在性を顧慮しないで、其れの價値性にのみ注意する見方が其の二である。併し其の第一の見方は、文化の見方の本質的のものを忘れ去つて居る。第二の見方は、全般的、包括的だとは言はれないが、併し其れの本質的の見方を忘れては居ない。今若し其の第一の立場に立つとすれば、文化は絕えず變化し推移して居るであらうが、其の第二の立場に立つとすれば、文化は永遠不變的であり、時代の推移により、其

の意義を變更せしむる事が無い。我々は此くして、文化に就き次の如くに言ひ得るであらう。文化は、其れを內容的に見れば、彼此互ひに同一のものでは無い。けれども其れの本質を考へれば、文化は其れの唯一の意義を發揮し、彼此互ひに其れが內容を變へることによつて、其れの意義をまでも變更せしむる事は無い。例を藝術に取るとすれば、藝術品の異るに隨ひ、其等は無數の個性を持つて居るが、併し其れが一の藝術たる意義を發揮して居る點では、本質的に彼此全く其の歸するところを同じくするといふ事が出來る。

(3) 併し價値が文化に於て實現する仕方は全然個性的である。文化に繰り返しはあり得ない。

(4) 此くの如き文化の現實の繰り返し難き一連續を我々は人間の歷史といふ。歷史は常に文化史なのである。

(2) 文化の比較及び其の區分

文化を比較すること

凡そ文化なるものゝ特質は、右の如き限定を持つとすれば、次に我々が一の文化と他の文化とを比較し分析し、時に其れの値打ちの高下を對照しようと欲する場合に、いかなる注意を加へる事が忘れられてならないであらうか。

各價値範圍は自律する

(1) 文化をして其れが文化である事の意義を發揮せしむるものは、其の中に內在するものとして常に考へられる普遍妥當的價値である。此の如き價値として、我々は學問、藝術、道德、宗敎、法律、經濟等、其れ々々の文化に固有なる其れ々々別個

の價値の成立を考へなければならない。言ひ換へれば、藝術は藝術として其れに固有の價値を持つ。藝術の批評は其の固有の藝術價値の立場に於て爲さる可きである。學問や道德の固有價値の立場から、藝術の値打ちの高下を批評するは大いなる誤謬である。例を以て言へば、今一枚の裸體畫ありとし、世の道德家が「其れは社會の風儀を亂るが故に美なる作品では無い」と批評したとすれば、此の批評は正當で無い。又人物畫を見た生理學者が、此の顏は歪曲して居るから、正しい人間の描寫では無い」と批評し、花鳥圖を眺めた植物學者が、「此の花の雄蕊の數は二本だけ多いから、間違つた寫生圖だ」と批評したとすれば、是等はすべて藝術を藝術として批評したのでは無い。勿論我々は藝術品を他の見方から批評することをいけない事だとは言はない。經濟の立場に立てば、いかに高貴なる藝術品をも、貨幣價値に換算し、此れを賣買するは、何等不當のことでは無い。たゞ此く他の價値の上に立つて見られた批評は、藝術品を藝術の埒內に置いて批評した仕方では無いといふのである。

各々の文化は、悉べて其れに固有なる價値を擔ふ。而して此の價値は絕對に自律し、他の價値の座標軸の上に換元せしめられ得ない。其れ故に我々が一の文化を、其れの本質に於て考慮した時には、其の文化に固有なる價値以外の他の價値の見方より、其れを云々すべきものでは無いのである。(1)

*(1)此の事に就ては、特に『拙著文化哲學入門』一二三頁以後、第二篇第三章各文化範圍の自律的成立に述べて置いた。

個性の見方と價値

(2) 一の文化は其れに特有の個性を持つとしても、其の個性は、此の文化に內在する普遍妥當的價値に對せしめられての個性であり、其他の價値に對せしめられての其れでは無い。奈良朝時代の彫刻が、其れに特有の個性を持つとすれば、我々は此の

個性を何等かの概念を以て表現し得るであらう。今此れを多元論的一元論とか、中央集權的とか、華嚴敎的とか呼んだとする。是等の概念はすべて藝術上の術語では無い。第一は思想的、第二は政治的、第三は宗敎的であると言へよう。然らば是等の概念を以て、藝術としての彫刻の個性を表現したとすれば、其等の個性は、或る時には思想的、他の時には政治的、思想的等の見方に立ち、其れ々々に固有の價値の見地より決定せられたのであるか。言ひ換へれば彫刻が一の藝術品としての意義を發揮して居る見方は、藝術價値の立場に於てゞあるが、併し其れを個性として見る見方は、藝術價値以外の他の價値の立場に於てゞあるか。決してさうでは無い。彫刻が其等の個性を持つと見る見方は、依然として藝術價値の立場に於てだ。藝術品なればこそ藝術品の個性を持つと言はれざるを得ぬのだ。其れ故に、よし此の個性を或は甲、或は乙と呼ぶとしても、眞に我々によつて直感せられつゝある個性は、其等の概念の何れによつてゞも、精密にの言ひ現はされて居ない。眞の直感せらるゝ個性は、多元論的一元論、中央集權的、華嚴敎的等、無數の表現の中の一つによつては、ありの儘に表現せられず、寧ろ是等を綜合し統一した其の極限に立つ。卽ち個性は、眞に直感せられる、其の唯一のものだ。そして此の唯一の個性は、たゞ藝術價値にのみ照應するものである。繰り返して言ふ。文化の個性は其の文化に固有の價値の立場に於て見られたものであり、其の固有價値以外の立場に於て見られたものでは無い。

現實基礎を標準としての文化の文化

(3) 文化を區分するとすれば、何を其れの標準に選ぶ可きであるか。

第一には、其の文化の現實基礎となつた存在を標準とする。例へば其の文化は、少數貴族の懷抱するものなるが故に、此れを貴族文化と呼び、他の文化は、同樣にして一般民衆の上に榮えたものなるが故に、此れを民衆文化と呼ぶが如きである。

此の分類法は必ずしも不當のものでは無い。文化は常に其れの現實基礎を持つものなるが故に、其の見方から此れを分類する事も亦確かに可能の一方法であると言へる。併し其れは分類の最も正しい仕方だとは言へない。文化をして文化たる意義を發揮せしめるものは、其の現實基礎の中に内在する價値自體であり、論理的には、價値は如何なる現實基礎を選んで其の中に内在しようと、價値に取り其れは全く自由である。其れ故に現實基礎を標準として文化を分類すれば、文化自身の意義の上に全然の混亂を惹き起す。例を以て言へば次の如し。

今貴族文化と民衆文化との二區分を文化の上に加へたとする。若し其の分類が嚴密に現實基礎の上に立つて爲されたものとすれば、其の結果は甚だしく混亂したものとなる。少數貴族の中にも、一般民衆的の氣分と生活とを持つたものが無いとは言へず、又逆に、一般民衆の中にも、却て少數貴族と類似した稟質や思想を持つたものゝ存在するを、全然排斥する事は出來ない。然る時には、現實基礎としての少數貴族と一般民衆とを標準として分類せられた結果の文化は、其れ々々に少しも統一せられた本質や個性を持ち得ない。然らば此の分類は、文化を文化として分類する仕方の中の最も拙劣なものと言はれなければならない。

併し我々が、貴族文化と民衆文化との二區分を爲した時に、其の分類によつてゞも何等かの意義のものを會し得るは何故であらうか。此の場合我々の會得したものは、實に其れ々々の文化の持つ個性であつた。貴族文化、民衆文化と言へば、單に此れを概念的に言ふので無く、實際の歴史的現實の上に就て言つたのである以上は、――例へば平安朝文化と江戸文化とを對した場合の如く――、其等は確かに其れ々々の個性を持つのである。若し其等が特有の個性を持つ以上は、貴族文化といひ、民衆文化といふは、其れに特有の統一を持つ筈であり、隨つて其れに固有の價値を内在せしめ、文化としての意義を發揮する。此の如くんば、よし理論の上では、存在は文化の本質を規定し得ないとしても事實の上では、十分に其れを爲して居る

ことになる。我々は此の矛盾を如何に解決す可きであるか。勿論私は、其れあるが故に、存在は價値を規定するとは言はない。此れは如何なる場合にも正しい理論では無い。併し私は、一の文化と、其れの現實基礎との間には、何等の關係も無いとは斷言し得ない。唯物史觀說を其の儘に信ずるものでは無いけれども、個人が集結して社會を構成する場合には、其の社會――卽ち文化に對せしめられては、其れの現實基礎となるもの――に對應し、其の社會が生產する文化は、必ずや其れに固有の固性を持つに至ると信じて居る。其れを考へれば、文化を分類するに、現實基礎となるものを其の標準と爲す事は、全く意味の無いことでは無い。併し其の場合には、我我の分類の見方は、實際には現實基礎を顧慮して居るのでは無くて、其の基礎の上に成立した文化の個性に着目して居るのであつた。例を以て言へば、貴族文化、民衆文化といふは、其等の文化の持つ其れ々々の個性を考へて居たのであり、此の個性を考へることが出來なかつたとすれば、換言すれば其等の文化は一の統一せられたもので無く、內容に於て全く混亂したものであつたとすれば、我々は貴族文化とか、民族文化とか、或る特定の名稱を以ては呼ばなかつた筈である。

歷史的個性に隨つての區分

前の見方の考察の結果は、直ちに第二の分類の仕方を我々に暗示した。文化を分類する爲めの第二の標準は、其の文化が歷史的に持つ個性だ。例へば奈良朝文化、江戶文化といふは、其れ々々の文化の持つ個性によつて此れを標識したのである。廣義に於ての奈良朝文化を細分するに當つては、我々は此れを推古期、白鳳期、天平期といふ風にし、更に天平期をすらも前、中、後期の三つに區分するが、此の區分は、單に年號や特殊の政治的事實を標準としたのでは無く、全く其の文化の持つ個性を標準に置いたのである。そして此の分類の方法は意味を持つ。其れは文化の分類の仕方として、文化の本質を忘れたものでは無い。事實に於て我々は屢々此の分

類の仕方を採用して居る。

けれども其の仕方は全く嚴密なものであるかと言へば、必ずしもさうだと言はれない。其等の個性ある文化は、歴史の一連續の中に現はれ來り、繰り返し難き歴史の推移は、よし其のいかに短かい期間を選び取るとも、其の分離の前と後とにより、個性の截然たる區別を見ることは不可能である。天平期を前、中、後期に分つとしても、其等の間の個性の相違は絶對的のものでは無い。又、此の點を其の分離の基準と爲すといふ一點は現實歴史の上に求められない。文化の個性的推移は、現實的には全然漸進的だ。隨つて其の個性により文化を分類する仕方は、絶對に嚴密なものだとは言はれない。

價値を標準としての區分

然らば凡そ文化の分類は、常に相對的に止まるより外は無いかと言へば、決してさうでは無い。最後に私は最も完全な文化分類の標準を持ち出さう。其れは卽ち價値である。美價値を內在せしむるものを藝術と呼び、善價値を內在せしむるものを道德と呼ぶ。そして美價値と善價値との間には、認識論的には何等の關係も無い。其れ々々の價値は自律する。其れ故に此の價値の相違を基準に取り、文化をば學問藝術、道德、宗敎、法律、經濟等に分つとすれば、其の分類は全く絶對的であらう。

(3) プロレタリヤ文化の問題

プロレタリア文藝の問題の批判

以上、私が文化の本質を考察して辿り來つた經過には、多くの誤謬を含んで居ることは考へられない。已ならず、其れは根本的にいかなる主張を爲しつゝある人達に對してゞも、すべて公平な意見では無かつたかと思ふ。若し其のことを讀者が容認

せられるとすれば、私は今始めて所謂プロレタリア文藝の問題に關し、正當であると私の信ずる解決を記し得るところへ到達した。

プロレタリア文藝の問題に關し、從來我國の文壇に現はれて居た主張には二つある。(1)文藝の持つ價値は絶對至上であり、プロレタリアとブルジョアの相違により、其の價値を變更せしむるものでは無い。(2)藝術の內容は時代の變化に對應しなければならぬ。從來の文藝はブルジョア文藝であつた。當來の文藝はプロレタリア文藝でなければならぬ。以上二の主張は、共に眞理ではあるが、併し其れのみを主張して他を排斥する時には誤謬のものになると私は思ふ。次に其の批評を述べて見よう。

藝術の本質は永遠不變的

(1) 藝術の本質、藝術が藝術たる所以の價値は、時代の推移と共に變化しない。今若し世にブルジョア文藝及びプロレタリア文藝と呼ぶものありとするも、藝術價値は其の何れの中にも內在し得る。「ブルジョア文藝なるが故に美では無い」と言はるべき根據は何れにも無い。況んや文藝の題材の如きは、ブルジョアに求められようと、はたプロレタリアに求められようと、其れは藝術の本質を動かし得る原因では決して無い。又今ブルジョア文藝が藝術としての價値を擔つて居たのであるが、其れは時代の推移に伴ひ、プロレタリア文藝によつて其の地位を奪はれ、此のものが藝術としての價値を擔ふに至つたとすれば、其の時藝術の藝術たる所以の本質は全く甲より乙に變化し去りたるかといふに、決してさうでは無い。美價値が美價値たる所以の意義は永遠不變的である。

藝術の個性は無限に豐富

(2) 併し其の文藝が內容の上に於てプロレタリア文藝であることは、何等藝術の本質を破るものでは無い。否寧ろ、文藝の視野は人間の生活全體なるが故に、其れの

取扱つた材料なり、此を取扱つた態度なり、又其の中に暗示せられて居る作家の理想なりが、プロレタリア的であるは、至當のことと言はれねばならぬ。なほ換言すれば、一の藝術品がブルジョア的個性を持つは何の差支の無いことであると全く同じ程度を以て、他の藝術品がプロレタリア的個性を持つことは、十分に容認せられなければならぬ。そして或る鑑賞者が、其の一の個性に執着して他の個性を排斥し、隨つて其の個性を持つ藝術身體をも、藝術の埒外に放逐せんとするは、憎む可き專制である。

藝術の持つ藝術的形式

(3) 此の如く、私は十分にプロレタリア文藝の藝術としての成立を容認するものであるが、併し其は一の藝術としての地位を要求する限り、藝術としての形式を持たなければならぬ。單なる材料の羅列は藝術では無い。我々が一の文化の個性といふは、其の文化の形式の持つ個性のことだ。隨つて一の藝術が藝術として持つ個性は、甲乙互ひに融通し難き特質を持つ。其れ故にプロレタリア文藝が藝術として持つ藝術的形式は、必らずしもブルジョア文藝の持つ其れと同一であるを要しない。ブルジョア文藝の立場から見れば、プロレタリア文藝は、荒けづりの、生のまゝのものゝ樣に見られることがあるとしても、却て其れが新らしい形式であるかも知れないのである。未來派や立體派の藝術は、藝術形式を全然的に打破する意味に於ての新派では無く、實は新らしい藝術形式を創作したものだ。藝術的形式とは、通俗の意味に於て、甘つたるく美しといふことでは無い。其れが藝術的であるとは、ただ此の場合をのみ意味するのだと考へる人は、甘つたるく美しく無い藝術は、其の中に藝術價値以外の價値を內在せしめるから貴といのだと誤り考へ易い。けれども藝術價値はさうした狹い意味のものでは無い。一時文藝で議論せられた、文藝の內容的價値の論の如きは、全く藝術價値を餘りに狹義に解したものであつて、一顧の

價値をも持たない。

藝術の門を通ほしての全人格的感動

(4) 偉大なる文藝が、我々鑑賞者に與へる感興は全人格的である。我々は單に其の作品を美しいと言つて悦ぶのでは無く、道德的に動かされ、社會的に激勵せられ、又宗教的に聖なるものへ沈潛せしめられる。隨つて藝術は、所謂藝術價値の支配する以外の立體的世界だと考へられる。私も一應は其の見方に贊同しよう。いかにも藝術の全內容は藝術的ではあるが、併し同時に全人格的であり、人類的であり、又全價値的である。我々は一體此のことはいかに解す可きであらうか。私は信ずる。其れが卽ち價値の價値たる所以であると。價値は單なる概念的形式では無く、人格自身の內面的法則性である。價値の尊嚴なるは、自律的人格の尊嚴なるが故である。其れ故に我々は、藝術價値により充實せられ悉した偉大なる藝術品を鑑賞する時には、直ちに其の價値の基底に實在する人格自身へ歸ることが出來る。其の時全人格的の感動を受けるのは當然であらう。併し此の如き全人格的感動は、道德からも學問からも、又宗教からも與へられる。今の場合には、其れは藝術の門を通ほして我我の人格に訪れるものであつた。そして其の全內容が人格との直接交渉を保つことが出來た時に、我々は此の全內容の上に唯一の藝術價値は光被して居るといふのである。

藝術の爲めの藝術

(5) プロレタリア藝術は、プロレタリアの革命的鬪爭の爲めのものであるといふは、正當で無い。藝術の目的は常に藝術價値である。言ひ換へれば、藝術はあらゆる場合に藝術の爲めのものだ。藝術の目的を他の經濟的價値や政治的價値やに求めることは、價値の自律を損傷せしむる所以のものとなる。

當來藝術としてのプロレタリア文藝

(6) 併しプロレタリア文藝は當來藝術として今後大いに興隆しなければならぬといふ要求には、十分の意味が含まれる。私は其の意味を次の如く解しようと思ふ。

人間の歴史は其の推移と共に、一段階は一段階と、價値的に値打ちの高いものへ進められなければならぬ。人格は歴史の中に絶えず實現せられなければならぬ。言ひ換へれば、我々の人格的内容は、其の一部的偏局的であつた實現から、其の全部的包括的である實現に向つて歴史を創造しなければならぬ。此の見地に立つ時には、所謂ブルジョア文藝の實現して居る人間性は、プロレタリア文藝の當に實現しようとする其れに對照せられて、なほ部分的であり、全人格的では無かつたかも知れない。プロレタリア文藝の正に實現しようと欲する人格的内容は、勿論プロレタリア的であり、社會革命的であつたとしても、其れの意義は此の革命の手段となることを以て終るのでは無い。プロレタリア文藝は、もつと究極的の世界を豫望して動かなければならない。

同じ事が一般の文化に言はれる

私は今問題を文藝にだけ局限して考察した。其れは我國で現に問題となつたものであるからといふ許りでは無く、一般にプロレタリア文化の問題を例解するに最も適して居ると考へたからであつた。右と全く同じい議論は、藝術以外のすべての文化、學問、道德、宗教、法律、經濟等にも適用せられ得ることであるが、今は其の一々の議論を省略しよう。

(4) ルナチャルスキイ氏の文化論

ルナチャルスキイ氏の論文

プロレタリア文化を論じた傾聽す可き多くの議論の中で、私はルナチャルスキイ氏の意見を、次に紹介し、分析して見よう。此の問題に關し、氏の公表した論文と演說筆記とは可成りに多いが、今私は其の中の一つとして有名な、「勞働者の自己敎育」(1)といふ論文を臺本として取らう。

*(1) A. Lunacharski, Self-Education of the Workers. 此れは The Workers' Socialist Federation からパンフレットとして刊行せられて居る。ルナチャルスキイ氏の最も新らしい論文は、Die kommunistische Internationale, No. 23 に掲載せられた Fünf Jahre Revolution であり、其の中では過去五個年の文化敎育の大綱を敍述してある。

ルナチャルスキイ氏は論じて言ふ。

『自己自身を自由ならしめんとして鬪爭しつゝあるプロレタリアの文化は、此を嚴密に定義すれば、階級文化であり、鬪爭の上に基礎を置く。其れはロマンティックだ。其は甚だ劇烈なるものにして、其れの形式は惱む。何故なれば、此の嵐の如く且つ悲劇的なる實質から、定まつた、且つ完全な形式を精練し上げるだけの時の餘裕が許されては居ないから。

『最高の發達に到達した階級と國民とは、其の文化に於てクラシカルである。自己表現を渴求する階級はロマンティックであり、且つ其のロマンティシズムは「ストゥルム、ウント、ドランク」の典型的特質を持つ。廢滅す可き運命を持つた階級は、他の形式のロマンティシズムを持つけれども、其れはメランコリイ、無氣力、及び廢頽の其れだ。』

ストゥルム、ウント、ドランク運動として

此れによつて見る時には、第一にプロレタリア文化は一の階級文化であり、鬪爭

的である。其の新興文化は未だ確定した形式を持つたものでは無く、たゞ嵐の如き熱望の表現だ。けれどもなほよく彼の議論の趣旨を考へて見れば、此の場合の「闘爭」は、單に經濟的の意味を持つものでは無い。彼は依然として、文化を文化としての見方の上に置く。其れ故、プロレタリア文化の興隆は、要するに廢頽のロマンティシズム又はクランシズムを破壞して、新生命により充實せられたロマンティシズムを建設しようとするストゥルム、ウント、ドランクの運動だ。

此く言ふならば、世のプロレタリア文化の反對者といへども、恐らくは彼の所說に傾聽するに相違無い。歷史を顧みれば、此の如きストゥルム、ウント、ドランク運動は何回と無く繰り返されて來た。廣義に於てのルネッサンス――其れがプロレタリア文化の目的だ。彼も論じた如く、凡そ一の階級や國民の文化が最高の發達を遂げ、濫熟の極致に達したとき、其の文化の形式はクラシカルであり、廢頽的ロマンティシズムの精神を以て自らを充滿せしめる。我々は此の文化の個性を價値無しとして否定することが出來ない。併しながら人間の歷史は、絕えず生み出される要求のすべてを包容して、全人格的の文化形式を創作しなければならない。其處には生命のストゥルム、ウント、ドランクが常に繰り返されて居るのである。

プロレタリア文化と社會主義との關係

然らば此のプロレタリア文化と社會主義との關係は如何なるものであるか。

『社會主義者とプロレタリア文化とは相互の間に實質的の著しい相違ある故を以て、我々は兩者の間に緊密の關係無しと結論してはならない。我々は、葛藤は理想の爲めの葛藤であることを銘記しなければならぬ。卽ち其の理想は、同胞主義と完全なる自由の文化だ。人類を不具にして了つた個人主義の上に勝利を占めることだ。過去に於て爲された如く、强制と及び單なる自己保存の爲めに群集する人間の要求との上に基礎を置かず、自由に、又自然に、超個人的本體の中へ我々

の人格を沒入せしむることの上に基礎を置いた共同社會生活だ。』

理想の爲めの鬪爭

ルナチャルスキイ氏の此の見解は透徹して居る。プロレタリア文化は何故社會主義と結び付くか。プロレタリア文化がブルジョア文化を壞滅せしむるは、理想の爲めだ。卽ちプロレタリア文化は、ブルジョア文化の理想となつた個人主義を打破して、十分に人間性を發揮した、完全に自由な、同胞的共同社會生活を建設しようとする。社會主義の鬪爭の目的が亦其處にある。社會主義は人類的理想の爲めに鬪爭するのだ！

我國の社會主義者は、いかなる場合にも「理想」なる語を使用することを嫌忌する。『超個人的本體の中に我々の人格を沒入せしむる』ものが社會主義だなどゝ言つたならば、其の論者は何と言つて叱られるか分らない。併し流石は、マルキシストであつて同時に理想主義者たる態度を離れないルナチャルスキイ氏の言葉である。社會主義の主張はどうしても、此の最高の根原から論じ出されなければ其の意味は無いと私は信ずる。私の立場は全く右のルナチャルスキイ氏の其れと同一だ。私は先づ人間の理想を考へる。そしてマルクスがかのゴオタ綱領の中に述べたやうな、最高完成の共同社會生活を以て、理想の社會形式であるとする。其れに對比せられゝば、ブルジョア社會は既に其れの成立前提たる理想を誤つた。プロレタリアの鬪爭は結局理想の爲めのものだ！然るに我國の社會主義者達は、飽くまでも鬪爭の基礎をマルクスの社會必然論の上に置き、鬪爭の理想を近代唯物論哲學の中に溶解せしめた。其れが全然の邪路で無くて何であるか。

コロンタイ女史の新道德論

ルナチャルスキイ氏は、ブルジョア的社會と社會主義的社會との間の理想的相違

を、右の引用に於て甚だ明確に證示したが、コロンタイ女史の如きも亦其の論文の至るところに於て其の事を言つて居る。最も包括的に其れを論じた女史の論文は『新道德と勞働階級』[A. Kollontay, The New Morality and the Working Class]であるが、此れの英獨譯はまだ現はれて居ないやうである。併し其の有名な論文『淫賣に對しての戰ひ』[The Fight Against Prostitution]の中では次の如く論じた個所がある。

『我々は、從前の道德原理とは違つた原理の上に基礎を置く、我々自身の道德を形成し始めつゝある。例へば三年以前に我々は商人を完全に尊敬すべき人間だとして見て居た。若しも其の商人の書類が整頓せられ、詐僞的の破產に於て取引せず、其の顧客から公然と、且つ亂暴に、暴利を貪りさへしなかつたとすれば、彼は監獄へ打ち込まれる事も無く、他面に於ては却て尊敬の眼を以て見られ、「第一級の商人」、「老舗の一家」、「尊敬す可き市民」などゝ呼ばれたものである。

『然るに今や革命に際しては、商業及び商人に對する我々の關係は、根本的に變化した。今や我々は、其の「尊敬す可き商人」を一の投機者と呼ぶ。我々は彼の上にいゝ加減のお世辭形容語を附けない許りで無く、却て非常委員の前へ拉し來り、强制勞働の監獄内へ抑留して了ふのである。然らば何故此のことを爲すか。簡單に言へば、我々はすべての生長した市民をして、生產的勞働に從事せしむることによつてのみ、新共產主義者經濟を創造し得ることを知るからである。何人であれ、仕事をしないもの、他人の費用を以て生活するもの、他人の所得の上に生活するもの、換言すれば何等生產的勞働に從事しないものは、團體的社會に取り、共和國に取つては危險だからである。』

資本主義的社會と社會主義的社會との間には、其の經濟組織の變化と同時に、道德の見方に於ても右の如き對局線的の大變化を來たす。併し其の變化の原動力は寧ろ理想自體にあつた。同胞的共同社會生活の理想は、彼等を動かして、經濟的社會革命を斷行せしめたのであつた。

形式の完成は將來に

プロレタリア文化がブルジョア文化に取つて代る可き哲學的根據は、右の如くにして與へられた。併し此の如きプロレタリア文化は、果して社會に成立して居るか。其れは確然たる形式を持つて文化の世界に表現せられて居るか。ルナチャルスキイ氏は言ふ。

『如何なる理想も、其れに緣遠い土地や種子からは發生することが出來ない。其の理想を獲得する爲めに使用せられる方法と武器とは、理想自身に調和したものでなければいけない。其れ故に鬪爭しつゝあるプロレタリアに、我々は收穫のすばらしさ、形式の完成、及び勝利力の捕へられざる優美を期待してはならない。是等は將來になつて現はれ來ることである。とはいふものゝ我々は、其の鬪爭、其の苦鬪、其の堪忍の故を以て、プロレタリア文化は、恐らくは凱旋の社會主義の社會秩序に於ては考へ得られざる特質を持つに至るならんことを期待してよい幾多の理由を持つ。

『併し此の鬪爭しつゝあるプロレタリアは、眞に或る種の文化を持つて居るかといふ疑問が起きる。最も確實だ。第一に、其れはマルキシズムに於て本質的なるすべてのもの、――社會現象の立派な、力强い探究、社會學及び經濟學の基礎、哲學的世界觀の隅石――を持つでは無いか。是等のものに於てプロレタリアは、既に人間腦力の最も光輝ある達成と比較せられることの出來る寶を持つのである。

『のみならず、多くの國々に於て、プロレタリアは政治的範圍に於ける著しい組成力を證明した。』

プロレタリア文藝は、ブルジョア文藝に比較して、よい作品を提供して居ないとは、我國に於ても屢々聞かれた批評ではあるが、其れに對するルナチャルスキイ氏の答辯は要領を得て居る。我々はいかなる時代に起つたルネッサンスを顧るも、其

處には常にかうした混沌期を見た。既に一定の形式が與へられ、其の形式を指導原理としてストゥルム、ウント、ドランクは起るので無く、得體の知れない要求が先づ勃興して、然る後に其れにふさはしい形式が創作せられるのである。

ジムメル氏の文明論

近時スペングラア氏の西歐文明論は、通俗の意味に於てゞはあるが、至るところ論議の主題となつて居る。歴史哲學に關係ある問題を論じた著書や論文の中で、氏の意見が批評せられて居ない場合は殆ど全く見られないといつてもよい位である。我國の雜誌の上にも其れに關係ある論文の紹介は既に幾つか現はれて居る。然るにスペングラア氏の文明論と相竝んで、今一つ有名となつた現代文明論があり、此れも亦他の論者の中で幾多の批評を受けた。其れはかの偉大なる哲學者ゲオルヒ・ジムメル氏の文明論である。其の著としては、『近代文化の葛藤』[Georg Simmel, Der Konflikt der modernen Kultur, 2 Aufl.,1921] がある。

ジムメル氏の此の著を全體的に紹介して居れば長くなるから、今のルナチャルスキイ氏の所論に關係ある部分だけを取扱はう。ジムメル氏によれば、歴史の對象としては、「文化形式の轉變」[der Wandel der Kulturformen] が注意せられなければならない。歴史に於て文化樣式は此れより彼れへ、死しては生れ、生れては死ぬ。例へば今十七世紀より十八世紀頃にかけての文化樣式を見るとすれば、其處には個人の解放、生活の理性化、幸福と完全とへの人間性の確實なる進みが新らしい理想となつて、其の全體を指導しつゝあるを見る、同樣にして、二十世紀に於ては「生命の概念」が世界觀の建設に對し、一つの新らしい根本動機となつて提供せられた。併し生命とは何であるか、純粹に生命としての其の意義は何であるか。此れは大いなる問題である。文化の古い形式が破却せらるゝは、或る新らしい形式への憧憬によつてゞなければならぬ。然るに今我々の前に起りつゝある多くの所謂新傾向は、果し

て何の新らしい形式を持つといへるか。例へば今藝術に於ける新傾向なる未來派、印象派、表現派等を見るとすれば、其處に何の形式が認められるか。勿論概念的に見られゝば其れも亦一の形式を持つとは言へるかも知れない。併し其の形式は、此の場合藝術家の期望に隨つた、言はゞ避く可からざる表出といふだけのものであり、すべて他の藝術理想の形式、其れ自身の意義といふ如きものでは無い。其れは藝術の美醜とは全く無關係にあるものだ。現代の所謂獨創心は、眞の意味の獨創心では無い。其等すべての傾向の基底に近代個人主義が潜む哲學的運動に於ても亦此れに匹敵するものがある。其れはプラグマチズムといふものだ。

形式の固定よりも要求の新鮮さ

ジムメル氏は此く論じて。我々の文化の新運動傾向の一々に就き、其れが何等の新形式をも持つて居ないことを攻撃したのである。併し私は必ずしも此の意見に贊成し得るものでは無い。いかにも生活は其れを適當に表現した形式を持たなければならぬであらう。文化の形式とは、結局文化の持つ普遍妥當性の事である。私が先きに論じた如く、普遍妥當性を持たないもの、永遠不變的のものに關係を持たないものは、單なる氣まぐれであつて文化では無い。文化は必らず個性的なる形式を持たなければならぬ。新らしい生活内容の充滿したものを形式化しなければならぬ。けれども此の形式は、我々の過去の歴史に於ては、何等の形式を持たない、たゞ古い形式を破る方にのみ向つた、其の新らしい生活要求の出産に先んじて與へられたであらうか。ジムメル氏が十七八世紀の生活形式を論ずるは、二十世紀の今日に於て始めて可能なことであり、其の世紀自身の中に這入り込んで居ては、形式の個性を何とも言ひ表はすことが出來なかつたのでは無いか。私は其れを疑問にする。未來派、印象派等は、其れ自身既に一の藝術形式を持つて居ると私は考へるが、併し其等に於ては其の形式の固定よりも其の要求の新鮮さの方が眼立つものになつて居

ることは、何としても否定せられない。現在に於けるプロレタリア文化の無形式は、プロレタリア文化自身を否定する理由になつては居ないのである。

新文化と舊文化

ルナチャルスキイ氏は、プロレタリア文化興隆の爲めの有力なる一闘士ではあるが、併し同時に舊文化の建築を全然的に破壞し去らうとは言はない。彼は莫斯科で開かれた公衆教化會議の席上で爲した演說の中では次の如くに論じた。

『我々は我々の古代記念碑を保存しなければならぬ。何故なれば、是等のものは、古い露西亞文明を我々に教へてくれるものであるから。併し同時に、近代世界の感情へ完全に觸れた藝術の誕生を見たいと希ふ。其の藝術こそは自由の爲めのより進んだ征服へ我々を導くであらう。』

革命と露西亞文藝

彼れの眼からは、いつも究極の理想が失はれて居ない。其れ故事實に於ても亦、革命後に古い藝術は全部的に排棄せられはしなかつた。言ひ換へれば「ブルジョア文藝」は或る意味では「撲滅」せしめられはしなかつた。其等の消息を詳しく傳へるものに、レベデフ・ポリアンスキイ氏の「露西亞に於ける文學と革命」(Lebedev Polyansky, Literature and Revolution in Russia, 1921)といふ論文がある。

『民衆をして過去の偉大なる文化的達成を知らしむる爲めに、次の作家の作品を刊行することが決定せられた。プシュキン、レルモントフ、ゴーゴリ、トルストイ、トゥルゲーニェフ、ドストイェフスキイ、ゴンチャロフ、グリゴリェヴィッチ、オストロフスキイ、ウスペンスキイ、ヅラトフラツキイ、レシェトゥニコフ、レヴィトフ、サルティコフ、チェホフ、子クラソフ、ニキティン、ナドソン、プレ

シュチェッェフ、フェット、スリコフ、リレイェフ、及び其のほか。是等は詩人又は小說家であるが、なほ文藝批評の他の作品の中から、次のものが刊行せられた。ベリンスキイ、チェルニシェフスキイ、及びヘルツェン。ラヴロフ、ミハイロフスキイ、ドブロリュボフ、及びピゼレフの作品の刊行が熟考せられて居る。』

此處に列擧せられた詩人小說家等は、前田河廣一郎、新井紀一、內藤辰雄がプロレタリア文藝の作家であるといふと全く同じ意味に於て、階級鬪爭の爲めの作家、革命の作家、プロレタリア文藝家であるとは言はれない。しかもなほ其等の作品は、露西亞民衆の前に『過去の偉大なる文化的達成を知らしむる』目的を以て、盛んに提供せられつゝあつたのである。

新文化建設の爲めの二途

併し此の事はプロレタリア文化の興隆に關しては誠に重大な問題だ。ルナチャルスキイ氏も言つた如くに、『プロレタリアの文化は、此れを嚴密に定義すれば、階級文化であり、鬪爭の上に基礎を置く。』プロレタリア文化は何故ブルジョア文化を排擊するか。『我々は、葛藤は理想の爲めの葛藤であることを銘記しなければならぬ。』トルストイやドストイェフスキイの作品は、人間性の藝術として、比肩せらるべくも無い偉大さを持つにしても、其れがブルジョア的社會の中で產出せられた作品である以上は、其れも亦排擊せらる可きブルジョア的個性を全然持つて居ないとはどうして斷言出來よう。ブルジョア藝術も亦、藝術として偉大な作品を持つた。けれども其の藝術を當に興隆す可きプロレタリア社會に持ち傳へ、其の文化の敎養をプロレタリアに與へることは適當であると言へるか。少くも今當にプロレタリア文化が芽生えを始めようとする混沌時代に、斷然として過去のブルジョア文化と其の袂を分つことをしないとすれば、新興文化の發達を期して待つ事が出來ようか。此れは確に大きな問題である。革命の露西亞にあつては、實際の經營としては右に述べ

た如く、全然的に過去のブルジョア文化から離れることをしなかつた。小説や詩の方面でさうであつた許りでは無く、殊に産業の専門技術的方面では、過去のブルジョア社會の專門技術を出來るだけ重用する樣にし、新興のプロレタリアは、此の重要なる産業建設事業の幹部的地位を占めることが出來なかつた。此の狀態は抑々何時でも繼續するのであらう。新興のプロレタリアは、實に新鮮なる要求を持つては居るが、併し其の要求を整々するだけの文化形式を確立しては居ない。隨つて此のプロレタリアを以て、直ちに舊社會秩序の重要地位を占めしむるに於ては、産業は麻痹し、文化は凝滯を來す。社會として此の如く危險なることは無い。畢竟其れは革命を失敗に歸せしむる所以である。併し社會の其の危險を顧慮し、何時までもプロレタリアに新建設事業への參畫の機會を與へなかつたとすれば、新興プロレタリアの新鮮なる創意心は萎縮せしめられ、結局新らしい形式を以てのプロレタリア文化の建設を見る事が出來ず、且つプロレタリアは折角革命を達成したにも拘らず、實質的には依然たるブルジョア的官僚主義が産業の上に、はた文化の上に跋扈することを不滿として、第二の革命をさへもくろむに至る。而して其れは現に革命の露西亞に見られる狀勢である。レエニン氏はルナテャルスキイ氏と同じく、革命の過渡期に於けるブルジョア文化の利用を主張し、コロンタイ女史は反對に勞働者の創意心の伸長を、何よりも重要な事柄であるとした。こゝに其の後者の立場に立つて、最も徹底的なプロレタリア文化論及びプロレットカルト論を爲したものがある。其れはルトゲルス氏の『知識階級と露西亞革命』(S. J. Rutgers' The Intellectuals and the Russian Revolution.)といふ論文である。

プロレットカルトの問題となる

けれども此の問題は、最早プロレットカルトの方法如何の問題に轉移して居る。私は先きに論じた如く、文化は歴史的に幾多の個性を以て變化し發展するが、併し

其の一の個性を以て他の個性を排撃することは出來ないとする。若しプロレタリア文化がブルジョア文化に取つて代る權利ありとすれば、其れは前者の含む理想の方が後者の含む其れよりも、一層全人格的であり、包括的である場合に限られるとする。其れ故にブルジョア的社會環境の中に生れた文化であつても、其の個性の偉大さが永遠的なる場合は幾らでも考へられる。例へばトルストイやドストイェフスキイの藝術が其れだ。けれども我々は又プロレットカルトの方法を考へる場合には、新興プロレタリアの創意心を伸長せしむる爲めに、或は全然舊文化の拘束を離脱す可きであるかも知れない。私は其の問題の解決を後に試みよう。今や我々はプロレタリア文化の問題考察から進んでプロレットカルトを論議す可き適當の場所に到達したのである。

(5) プロレットカルトの意義

其の言葉の意義

ブルジョア文化を排し、プロレタリア文化が興隆せしめられる事の理想的根據が、右の如くにして與へられたとすれば、我々は次に直ちに、一般民衆へ向つて其のプロレタリア文化を敎養せしむる實行の方案を講じなければならぬ。此處に於て所謂プロレットカルト運動は我々當面の問題となる。

抑々プロレットカルトの意義は何處にあるか。歸趨するところは唯一の目標であるが、私は便宜上次の如く分けて記さう。

ブルジョアカルトの打破

(1) プロレットカルトは現在のブルジョア、カルトを打破し、プロレタリア文化を興隆せしむることを其の目的とする。ブルジョア的社會の敎化が、ブルジョア的特

色をいかに濃厚ならしめ、形式的にも亦内容的にも、我々の人間性をいかに多く損傷して居るかは、今改めて論ずるまでも無い。私は嘗てラッセルの新著の内容を紹介して、此れと同じい趣旨のことを述べて置いた。〔後篇參照〕『東京朝日』紙上の論文の中にも其の事を多少詳しく例示して置いた。ルトゲルス氏の如きも前述の論文の中で、聲を極めて其のブルジョア的教育の弊害を攻撃した。ボオル氏は、『ブルジョア的教育は毒瓦斯の如き働らきをする』と書いて居る。

社會秩序の改造に於て、政治的、經濟的の改造は、割合に容易であるかも知れない。此の「文化」の改造、「世界觀」の改造は最も根本的の其れである。一朝一夕に其の目的を達する事は出來ない。しかし其の意義の上では、文化の改造こそ、あらゆる社會改造の眼目だ。ボオル氏は、社會改造の方法として次の三者を數へる。『方法。政治的範圍に於ける「エルガトクラシイ」。教育的範圍に於ける「前革命的プロレットカルト」。產業的範圍に於ける「間斷無き鬪爭」。實にも我々の運動としては、(1)政治的、(2)經濟的、(3)教化的の三者を其の主たる方面と爲すに相違無い。けれども其の三者の中では、プロレットカルトこそは究極最高の意味を持つと私は思ふ。ボオル氏の著の中に引用するところによれば、プロレットカルトをより確定した形に形成した佛國サンディカリストの一人ベルトが其の著の中で論ずるところに隨へば、社會主義運動は、本質的にプロレタリア的教育の運動、社會的教育の運動だ。ルトゲルス氏も亦次の樣に論じて居る。

『プロレタリアの獨裁は、共產主義的社會への推移の爲めに必要だ。其れはブルジョアジイの資源が依然として其儘に止まる限り必要だ。併し是等の資源の中で、心的武器、ブルジョアジイの文化は、破るに最も困難なものだ。』

『資本の沒收と社會化とは、其の後とへ知識と文化との社會化が續いて來ない限りは、十分なもので無い。前者は後者の條件である。』

鬪爭的革命的のカルト

(2) 隨つてプロレットカルトの意義は鬪爭的であり、且つ革命的である。其の內容が社會主義を宣傳するものとなるは自然の經路である。此處に於てか「宣傳」と「教育」との間にいかなる區別を置く可きかゞ、我々に取り一の問題となるであらう。ボオル氏等は又プロレットカルトに二期を區別し、此れを革命前のものと革命後のものとにした。兩者は內容的にも違ひ、其の中に含められる宣傳と教育との分量の割合も亦互ひに違つたものとなるであらう。

教育と宣傳との間に根本的の區別を置き難いことを私も亦十分に認める。併しながら若しプロレットカルトの內容が、單にマルクス唯物史觀の解說だとか、露西亞革命の歷史だとか、或は經濟學、政治學、農民運動史、勞働法規だとかいふ樣なもの許りであつて、宗教、文藝、哲學等の一般的教養を排斥するものであつたとすれば、私は此れを正しいプロレットカルトといふことは出來ない。プロレットカルトはもつと深いところから人間性の睡夢を喚び醒すものでなければいけない。我國のプロレットカルト運動論者がやゝもすれば、近眼的に前者の方法を取ろうとする事を私は遺憾とする。宣傳といふは教育といふより、一層手段的の言葉だ。民衆の教育は、或ることの手段として使はれるには、其の意味は餘りに自律的であり、其の價値は餘りに尊嚴である。民衆を教育して人格の品位、文化の價値、同胞的共同社會生活の自律性に氣附かしむるは、卽ち理想的なる教育の爲すところであるが、其の結果自づから現今社會の缺陷を厭惡し、其れが改造への心熱を釀育するに至るといふのであれば、其れこそ手段的の宣傳を超越してしかも正しく宣傳の目的を達したプロレットカルトであると私は信ずる。

教育の機會の獨占を打破

(3) ブルジョアカルトにあつては、教育の機會はすべての民衆に與へられて居ない。此れに反してプロレットカルトは、知識と教育との獨占を排斥し、すべての民衆が教育の機會を得ることを其の目的とする。其の半面には又かういふこともある。ブルジョアカルトにあつてはすべての民衆は生産的勞働に參畫して居ない。此れに反してプロレットカルトは全民衆の爲めの勞働教育を要求する。

例へばレエニン夫人は莫斯科に於ける公衆教育會議席上の演説の中で言つて居る。

『勞農露國に於ては無學は消失しなければならぬ。我々はすべての人達へ此の大事業への助力を乞ふ。知識と科學とは、全く財産と同じく、少數者の特權であつてはならず、すべての民衆によつて獲得せられるものであることが必要だ。知識を他人に與へることは各人の普通の義務である。』

ルトゲルス氏も亦言つた。

『ブルジョア知識階級と及び其の心的獨占は否定せられなければならぬ。階級としてのブルジョア知識階級に反對する勞働者の戰ひは、其れ故に、其の苦がい究極點まで戰はれなければならぬ。其れは新共和主義社會のための闘爭の一部分だ。そして實に主たる部分、最も骨の折れる部分だ。』

『我々の敢て爲す巨大なる戰爭は、一にして不可分離的だ。其れは獨占に反對することだ。よく其れが貨幣の獨占であると精神の獨占であるとに關せず、すべての獨占に反對することだ。』

現に露西亞では、すべての民衆へ教育の機會を與へることに其の全力を盡して來たから、全然文字を解せぬ民衆の數は此の數年間に著しい減少を示した。既に一九二〇年にマックレイン氏がルナチャルスキイ氏を訪問して、革命後の教育の狀態を尋ねた時の氏の答へは次の如きものであつた。(Mc Laine, The Educational Work of Soviet Russia)

『此の方法によつて三年の間に文盲は完全に無くなつて了ふであらうといふ事が

希望せられた。其處には既に或る重要な結果が現はれた。例へばペトログラアドでは、戰前に百六十萬の人口中、殆ど五十萬の文盲者があつたけれども、今や八十萬乃至九十萬の人口中、文盲者は一人も無い。莫斯科では戰前には百萬の文盲者があつたけれども、今は一人も無い。』

全民衆の爲めの勞働學校

次に其の教育は、全民衆の爲めの勞働教育たる特色を持つ。ルナチャルスキイ氏は其の演說の中で言つた。

『「新らしい學校」とは何であるか。其れはいかなる仕方に於ても支配階級が「下級」勞働民衆のために組織したものと類似點を持つてはならぬ。此の「階級」教育を打破する爲めに我々は、何人の爲めにも特別の權利の許されて居ない、「萬人の爲めの教育の一標準」なる原理を採用しなければならぬ。民衆は商品の生產の主たる要素であるから、其の結論として必然的に「新らしい學校」は學生をして勞働の準備をなさしむるものとならなければならぬ。教師も亦勞働の出來る人物でなければいけない。新學校のモットオは、「生活することは勞働をする事だ」でなければいけない。其れ故に我々は、「勞働」を我々の教育制度の出發點、我々の教育の主題と爲し、技術的知識の增加を目的とする。我々の學生は彼等自身を共同社會の勞働の一部分として感じなければならぬ。少年少女は彼等自身を大生產者となることに準備しなければならぬ。

殆ど全く其の儘に私の同感を喚ぶ主張だ。』

(6) 折衷的教育形態への非難とプロレットカルト

理想主義的改容

プロレットカルトの意義は何處にあるか。昨年〔一九二一年〕八月十六日、十七日、白耳義勞働者中央教育委員會の招待によつて開かれた勞働者教育の國際會議に其の代表者を送つた諸國の教育團體は概ねマルクス學派に屬し、其の學說の上に立脚するものであつた。プロレットカルトの主張者の意見は、概ねマルクス主義の上に立つものであり、私が前章に記述したものも亦全く其れであつたが、私は今其等の所說を離れ、私自身の言葉を以てプロレットカルトの意義を敍述して見よう。隨つて前節の所論と重複するところは多くなるが、すべては私自身の哲學を以て改容せられた形のものである。

學校制度の革命期

(1) 私は先づ現在の教育形式としての學校制度に革命期の到達して居ることを强く主張せざるを得ない。

教育は何處に於て行はれるか。其れは學校である。小學、中學、大學、其他諸種の專門學校を併せての組織的學校である。今若し自ら教育を受けようと欲する一青年ありとすれば、彼は既設の何れかの學校に入學して、其の學校の制定するだけの全教育內容を其のまゝに受け入れなければならぬ。然る時には、(a)彼は先づ其の勉學期だけ、共同社會の一員として負擔す可き勞働勤務より離籍しなければならぬ。(b)隨つて彼の勉學期だけ、何人かゞ其の經濟的生活を支持しなければならぬ。(c)教育的內容に關しては、彼は何等の發言權をも持たない。(d)言ひ換へれば、彼の直接的個性的創意性と學校とは、直接的に結び付く事が出來ない。

其の結果として、

(1)教育を受ける機會を持ち得る爲めには、十分なる經濟的支持を必要とする。プロレタリア階級に屬するものは、自ら其の教育の機會を持ち得ない許りでは無く、其の子女をして此の教育機關の與ふる利福に參畫せしむる手段を全く持つては居な

い。よしいかに數多く諸種の教育機關が建設せられ、教育網は逼滿したとしても、其の利福にあづかるものは、ブルジョア階級に屬するものだけである。知識はブルジョア階級に獨占せられる。

(2)教育を受けるものが、既說の學校にある間、彼等は何等の勞働勤務をも爲さないから、共同社會は甚だ著しい比率に於て其の生產の損失を被つて居る。

(3)學校にある間と學校を出た時とを以て、人間の教育は全然的に時期を劃する。社會が學校を見る眼は、言はゞ機械の製造である。人間が學校を出た時、機械は完成せられたのだ。社會はたゞ此の機械を使用し、消耗するのみだ。人が一旦學校を出たとすれば、社會は彼等に決して教育の機會を與へない。

(4)學校は學校として、構成せられ、組織化せられた一の目的を持ち、其の目的に隨つて其の教育內容を按配し、其の方法を選擇する。其處に教育を受けるものは、其の學校機關と自らの創意心を直接に結び付ける事が出來ない。學校は學校の目的を持ち、民衆は民衆の生活を持つ事となる。

(5)學校の經營には巨大なる費用を要する。此の計費の負擔に堪へるものは、國家及びブルジョア階級である。其れ故に學校はすべて此等のものゝ經營するところとなる。然る時には、ブルジョア階級は、教育を受ける機會を自ら獨占するに止まらず、學校教育の目的、民衆教化の目的を自らの階級の支配下に置く事が出來る。其れ故に學校は國家及びブルジョア階級の爲めに、最も有力なる、自らの利益の存續を宣傳する機關に化成せられて了つた。

教育機關の本來的形態

併し我々の教育は、此の如き段階に止まつて自ら安んず可きものでは無いのである。教育の目的及び其の形態は、本來如何にあるが正當であるか。

(1)教育の目的は自律的人格を作るにある。教育機關の取る教育目的は、絕對に一

階級の利害を本位とするものであつてはならない。

(2)教育の機會は萬人に均等でなければならぬ。此の場合我々は單に形式的なる、ブルジョア的なる機會の均等を要求しない。其の均等は現制度の既に容認するところであり、學校は何人の入學に對しても平等に門戸を開放する。たゞ實質的に、經濟的に、教育の機會は萬人に均等では無いのである。我々は其の弊害を打破しなければならない。

(3)教育は生涯を擧げての事業である。其れ故に、我々は教育の爲めに全然的に勞働を廢棄す可きでは無く、又勞働の爲めに全然的に教育を廢棄す可きでは無い。學校は、我々が勞働しつゝ、其の生涯を悉くして學ぶ事の出來る機關でなければならぬ。

(4)學校を組織するものは、民衆を離れての特殊の專門家、官吏又は特殊の階級であつてはならぬ。學校は民衆の要求の直接的なる表現である。其れ故に、學校の組織編制其の内容等は、民衆自身の手に歸せられ、民衆自身の要求と常に直接的に照應するものでなければならぬ。

此れは當來教育の眼目とするところであると私は信ずる。

協調的試みの數種

右の如き要求は、教育に於ける一の力强き近代的傾向となつたが爲めに、現在の教育制度及び教育的方法と、私の主張した究極的意味の其れとの間に、折衷的意義を有する幾つかの試みが、近代になつて盛んに實行せらるゝに至つた。併し其等はすべて根本的に現在の其れを肯定するものなるが故に、其の目的其の方法、共に不徹底のものとならざるを得ない。然らば其等の試みには如何なるものが敎へられるか。

(1)補習教育及び社會教育を以て其の目的を達しようとする試みがある。今先づ其

の後者の社會教育を見るに、此れは我々が主張する意義の教育と、其の目的を共通ならしむ點あるも、其の方法に至つては、多くの差違を持つ。社會教育は我々が主張する組織的教育よりも、もつと散漫な、もつと廣義な、意義と方法とを持つたものであり、其れは同時に我々の組織的教育と竝立して進むことが出來る。社會教育を以て我々の教育の代用にする事は出來ない。

補習教育を以て我々の主張する教育に相當せしめようとするものは、全く我々の主張の意味を解しない人である。補習教育は、學校教育の補充たる意味を持ち、隨つて學校の概念の理解に於て現在の其れを其のまゝに肯定して居る。此れに反して、我々は、所謂補充教育と見える樣な部分を、教育の本幹的部分とし、現在の小學教育の如きを其れの豫備的部分として見る。學校は勞働を爲しつゝ終生學ぶ教育の場所である。其の何れを指して補習と呼ぶ事が出來るか。我々の教育を理解しようと欲するものは、先づ根本的に此の見方の迷信を脱しなければならぬ。

(2)所謂補充教育よりも見方の進んだものにアダルト、エデューケエシェン(成人教育)がある。成人教育は歐洲に於ては大戰後殊によく發達し出した。學校概念に革命の起きた所以である。成人教育の方法と目的とは、殆ど全く我々の教育の其れと一致して居る。併し我國にあつて成人教育を主張するものは未だよく其の眞意を理解しては居ないと思ふ、そしてやはり現在の學校教育を主たる教育部分とし、成人教育を其れの補充であると考へる。成人教育の意義は斷じて其れであつてはならない。成人教育こそ教育の本幹であり、現在の所謂學校教育は、僅かに教育の一部分を占むるものに過ぎない。歐洲の成人教育は、次第に其の方向に向つて進みつゝあるに拘らず、我國の教育研究者が其れを理解し得ないのである。

のみならず成人教育が起つた時には、其の教育内容として著しくプロレタリア的特色を持つて居た。成人教育は、其處に學ぶもの、其處を經營するものを併せて、ブルジョア階級では無く、プロレタリア自身の力を以て支持し、繼續するものであ

るから、其の內容がブルジョア的宣傳敎育の其れで無くなるのは必然の勢ひである。併し歐洲の其れといへども過去の敎育より當來の敎育への過渡期に其の地位を占めるものであるから、今は十分なる程度に於て、プロレタリア的特色を發揮して居るとは言へない。然るに我國の成人敎育論者に至つては、其の敎育の內容がブルジョア的であろうと、プロレタリア的であらうと、さうした事には何の差違をも見ては居ない。寧ろ言へば、敎育內容にさうした區別のある事をさへ、理解して居ないのである。其れ故に其の成人敎育機關の經營者が何人であるか、其の機關の敎育目的がいかにブルジョア的であるか等には全く無關心となり、等しく此れを成人敎育であるとして稱揚しつゝある。我々は今後に其の風潮を打破しなければならない。

補助制度と大學擴張運動

(3)プロレタリア階級の子女として生れたが爲めに、よしいかに秀英なる能力を持つて居るにせよ、高い敎育を受ける事が出來ないで、空しく朽ち果てなければならぬ運命を持つた人達は澤山にある。かゝる俊英の子女は、國費又は地方費を以て敎育しようとする計畫がある。戰後現に國として其れを行つて居るところもある。從來は富豪の人達の中に育英資金を公共へ提供して其れと同一の計畫を實行して居るものがあつた。

けれども此の組織は、プロレタリア階級の敎育的要求の萬が一をも救ふ事は出來ない。そして其の目的としては寧ろ惡む可き期待を其の中に含む事さへある。其れは所謂人物經濟の思想であり、ブルジョア階級は、此の方法により、言はゞ優秀なる機械を社會の中に增す事が出來ると考へて居るのである。よし如何に國家が其の敎育費を負擔したにせよ、意義の上から言へば、失業者に救濟金を下附するとかいふ樣な一の恩惠的施設であり、敎育を受くるものゝ心理を卑屈ならしむるのみである。我々は敎育を恩惠として切願するのでは無い。人間として正當な權利として、

隨つて共同社會に對する正當な義務として、此れを要求するのである。

(4)大學擴張運動を我々の教育の其れと混同して居るものがある。大學擴張運動は、一時大いに社會より期待せられた時期があつた。併し今は其の運動は世界的に隆昌のものとなつて居ない。大學擴張教育は、教育の上に於ける一の溫情主義の發揮であり、其の意義はやはり恩惠的である。大學は學校としての大學教育を以て其の目的を完結する。大學擴張運動は其の正當の目的以外である。隨つて此の教育の內容は、徒らに大學を中心としての中央集權的のものとなり、教育に於ける地方主義、自治主義を發揮する事が出來ない。

右に論じた事項は、教育の意義を考へる上からは、何れも根本的の事柄であり、我々は其等數者の教育と我々の其れとを嚴密に區別しなければならないのである。然るに我國の教育論者にあつては、要するに外形さへ同じ樣のものであれば、其の意義などは何方でもよいと考へて居るものが非常に多い。我々はさうした論者の主張を徹底的に打破しなければならない。

學校の性質

然らば我々の主張する教育の場所、卽ち學校は、本質的にいかなる性質のものでなければならぬか。

(1)其れは勞働しつゝ終生學ぶ事の出來る教育設備である。

(2)若し特に勞働しないで學ぶ小學教育の如きものがあるとすれば、其れは全體の教育の中の一部分であり、教育の一變態であると言はなければならぬ。教育の根幹的部分は、第一に述べたものが其れである。

(3)其の學校は中央集權主義的のもので無く、十分に地方主義的のものである。

(4)其の教育の內容は、プロレタリア的である。

(5)其の經營者は、直接にプロレタリア自身でなければならぬ。例へば勞働者の場

合には、其の學校の經營者は勞働組合自身である。此くして學校は學校として、民衆の要求を離れての一組織を固有するといふでは無く、學校は民衆の教育的要求の直接の表現として、學校と民衆と不可分離的、直接的の關係を持たなければならぬ。

(7) プロレットカルトの諸問題

プロレットカルトの二期

プロレットカルトに革命前期と、革命後期と二期の區別を爲し、其れによりプロレットカルトの內容をも異ならしめるとするのが、プロレットカルト主張者の一般的見解である。例へば ボオル氏は其の主張を爲した。我國の雜誌に現はれたプロレットカルト論も亦、殆ど例外無しに此の主張を爲すものであつた。私は其れに就き批評を加へて置かう。

我國の評論家が此の主張を爲したのは、恐らくはボオル氏の著を讀んだ爲めの影響であらう。併し私は其等の主張者に警告を發して置きたい。其れは、「今若し其の見解を取るとすれば、其の主張は當然他面に於てボリシェーヴィズムの理論を許すものでなければならぬ」といふ事である。若し其の論者が理想主義者であるとか、或はアナキストであるとかした場合に、なほ且つプロレットカルトの二期を論じつつあるとすれば、其の人は理論的に甚だ不齊合の議論を爲しつゝあるものと言はなければならぬ。

ボリシェーヴィズムの社會進化論に隨へば、社會は次の如き推移を爲す。

(國家形式)

(1)近代ブルジョア國家——(2)無產者獨裁の國家——(3)社會主義的共同社會——(4)共產主義的共同社會

(社會的及び經濟的構成)

(1)資本主義的社會――(2)資本主義社會と社會主義社會とは、常に後者のより嚮き優勢の狀に於て混合――(3)社會主義的社會。第一共産主義的階段――(4)共産主義的社會第二階段。

此れはマウトナア氏の著に隨つて書いたのであるが、今其の第三を第四に併合するとせば、次の如くになる。

(1)資本主義的國家――(革命)――(2)無産者獨裁の下にある無産者國家――(3)國家形式無き共産主義的共同社會。

此の中の第二と第三との間には、何等か革命的推移があるといふでは無く、第二段階の究極は自づから第三段階になるといふのである。

併し此の理論には大いなる疑問がある。右の如くにするならば、マルクスの所謂「過渡期」卽ち無産者獨裁の社會的政治的形式は甚だ長い時期のものとなり、結局其れが永久の社會的政治的形式だといふ事になる。何故なれば第三のアナキズム的共産主義共同社會は一の理想であつてユウトピアでは無い。其れは人間の永遠的努力を以てして實現の期無きものだから。なほ第一と第二との間にも同樣の關係を見る可きであるが、其の事は後に述べる。

ポオル氏は右の三段階を、自らのプロレットカルト論に適用した。

(プロレットカルトの段階)

(1)前革命的プロレットカルト(政治的範圍に於けるエルガトクラシイ。〔「勞働者の支配」の意〕産業的範圍に於ける「間斷無き鬪爭」〔他の場所には、「組織せられた勞働者の直接行動」と書いてある。〕――(2)後革命的プロレットカルト(革命的プロレタリアの獨裁の建設。反革命への强力なる抵抗)――(3)一の眞に普遍的なる文化。

此れをレエニンの國家論、革命論に對比すれば、兩者は思想的に全然同一のものになつて居る事は、明瞭になつたであらう。其れ故にプロレットカルトに革命前と革命後とを區別する以上、其の論者は最早ボリシェーヴィズムの理論を許容したもの

と言はれなければならない。

教權との關係

教育は一の教權により行はれて居る。或は教權により強制せられて居るといつてもよい。其の教權は、現在にあつては、政治的權力と一致し、結局國家は其の教權である。

其れ故に其の國家が資本主義國家なると、社會主義國家なるとは、其の強制する教育の內容に偉大の相違を來さしめる。其の相違は、教育の內容に於けるあらゆる對立的相違よりも恐らくは大いなるものであらう。此の事を考ふれば、プロレットカルトの內容は、政治的權力の推移卽ち革命と密接の關係を持ち、革命により、其の前期と後期と、全然的に內容を異らしめると言へる。言ひ換へれば、前革命的プロレットカルトは、資本主義との間斷無き鬪爭、ブルジョア文化の破壞、社會主義的精神の宣傳等の內容を持ち、後革命的プロレットカルトは、反革命的勢力の打破、プロレタリア文化の建設、共產主義的教育の徹底等の內容を持つと言ひ得るであらう。

併しよく考へて見れば、其れには幾多の理論的缺陷を含む事である。

單に教權の所在を異らしむるのみ

(1)第一に、其の思想はボリシェーヴィズムの革命論が持つと共通の理論的缺陷を持つ。

ボリシェーヴィキは政治力の把握を重大視する。勿論彼等は經濟的鬪爭を輕視するのでは無く、ボオル氏の如きも、政治的運動に並行し、經濟的運動としての直接行動を鬪爭の必要々素として數へては居るが、併しボリシェーヴィキの本領は政治的革命の先行にある。然らざれば、無產者の「獨裁」は必要である筈が無い。政治力

の把握と經濟生活の革命的構成とが常に同一段階を以て進みつゝある場合には、獨裁政治は必要のものにならないのである。此の如くにして、政治力の把握は、經濟生活の革命的構成よりも先行するものとすれば、單に外形的なる政治的革命は、眞の意味に於ての社會革命にはなつて居ない。社會革命は、政治力把握のキャタストロフィックの瞬間にのみ名付けらる可きものでは無い。

其れ故によし教權の中心は推移したによせ、プロレットカルトの內容は、此れを實質的に詳しく分解した結果、革命前期と革命後期と、果して其處に根本的の差違を認め得るであらうか。私は先きに、兩期の教育的內容を次の如くに書いて區別して置いた。

革命前期。――資本主義との間斷無き鬪爭、ブルジョア文化の破壞、社會主義的精神の宣傳等。

革命後期。――反革命的勢力の打破、プロレタリア文化の建設、共產主義的教育の徹底等。

併し此の兩者の內容を一應よく實質的に點檢して見るがよい。結局は同一のものになつて居るのである。例へば「資本主義との間斷無き鬪爭」は、政治的革命の達成せられた後も、依然として繼續せられなければならない。無產者獨裁の國家とは、卽ち「資本主義社會と社會主義社會とは、常に後者のより强き優勢の狀に於て混合したる國家形式であり、鬪爭す可き資本主義の無くなつた社會では無い。資本主義と社會主義と、後者は常により强き優勢の狀にあり、其れなればこそ、無產者の獨裁も可能なのではあるが、併し其れは單に「政治的に」優勢だといふだけであり、經濟的に、社會的に優勢だといふのでは無い。現に勞農露國に於て見る通りである。其れ故に、「資本主義との間斷無き鬪爭」と、「反革命的勢力の打破」との間には、實質の上に於ても、亦其の强さの程度の上に於ても區別は爲され得ない。政治的革命の達成せられた其の瞬間から、プロレットカルトの實質に差違の起る事は斷じてあ

り得ない。たゞ今までは賊軍の汚名を持つて居たプロ・レットカルトが公然と官軍になつたゞけの相違である。

同様にして、「ブルジョア文化の破壞」は卽ち「プロレタリア文化の建設」であり、「社會主義的精神の宣傳」は卽ち「共産主義的教育の徹底」に外ならない。プロレットカルトの實質より見る時には、プロレットカルトは突然的推移を爲さず、政治的革命は其れに幾千の影響をも加へないのである。

政治的革命と舊知識階級

私は他の場所でプロレットカルト運動を論じた時には、プロレットカルトは政治的革命の前にあつても、亦其の後にあつても、何れにせよ、半ブルジョア的プロレットカルトであるより外は無い事を主張して置いた。

レエニンの國家論にあつては、國家形式は一般に權力的强制の機關であり、其れはブルジョア的國家なるとプロレタリア的國家なるとにより異るところが無い。併し無産者國家にあつて最早一人のブルジョア的分子も無い樣になつた時には、特に國家形式によつての强制を必要とせざるに至り、國家形式は自然に消滅する。此の理論は、ポオル氏によつては其のまゝプロレットカルト論の上に適用せられて居る。プロレットカルトは、ブルジョアカルトは對向する限りに於て其の意味を持つのであり、隨つて其の意味は常に鬪爭的である。對向す可き何等のブルジョアカルトも無い樣になつた時には、「結局一の眞に普遍的なる文化」となつたのである。其の時は、最早プロレットカルトなる名稱を必要とせず、單に一般的カルトあるのみである。然る時にはプロレットカルトは國家形式と其の運命を共にするものであるといふ事も出來る。

此くしてプロレットカルトの存在するところは、同時にブルジョアカルトの存在するところである。眞の意味の、純粹のプロレットカルトは、たゞ究極理想社會に

あつてのみ可能である。然る時には革命前期のプロレットカルトがブルジョア的要素を含む事は避け得ざる當然の運命である。教權はブルジョア國家にあるから、其の國家の存立を危うする純粋のプロレットカルトの成立を其の國家が許して居る筈は無いのである。此くしてプロレットカルトは、革命前期にあつては半ブルジョアカルトであるより外は無く、又其れであつて何の支障も無い。

革命後期には、教權はプロレタリアの手中にあるから、其の時からプロレタリア國家は純粋のプロレットカルトを實施し得ると考へられないかも知れない。併し此の場合にも、事實的にさうした事はあり得ない。現に露國は政治的革命を達成したが、其の教育は勿論半ブルジョアカルトである。其れ故にコロンタイ女史の「勞働者反對」の運動の如きが現はれた。革命後に半ブルジョアカルトの必要なる事を最も熱心に主張しつゝあつたものは實にレエニン氏自身であつた。其れは彼の『勞農國家の當面の任務』[Lenin, Die nächsten Aufgaben der Sowjet-Macht, 1918] に於て最もよく現はれて居る。有名な論文であり、多くの人の熟知する内容ではあるが、我々の議論に關係ある部分を次に抄錄しよう。〔譯文は山川均氏のものがあるから、「社會主義研究」第四卷第一號より借る。〕

『今や特殊の時代――といふよりも寧ろ發達の特殊な段階に到達した。資本主義を完全に打破る爲には、吾々はこの時期に特殊な狀況に應じて、鬪爭の形式を適應させなければならぬ。

種々なる科學と技術の部所に於ける專門家の指揮なくしては、社會主義への推移は不可能である、何故ならば社會主義は、資本主義の成就したものを基礎として。更にそれ以上の生産力を實現しようとする、自覺ある大衆の運動を必要とするからである。社會主義はこの前進運動を、自己獨特の仕方により、自己獨特の方法により――更に具體的に云へば――ソヴィエットといふ方法によつて成就しなければならぬ、然るに專門家は、彼等を專門家たらしめた社會生活の環境そのものゝ爲

に、勢ひブルジョアに屬して居る。』

此の趣旨の事は、ブハリンの論文、『勞農露國の新經濟政策』[N. Bucharin, The New Economic Policy of Soviet Russia.] などにも十分に現はれて居る。政治的革命を達成したからといつて、其の時『ブルジョア、インテリゲンチアの花形』[these "stars" of the bourgeois intelligenzia, die „Sterne" aus den bürgerlichen Kreisen] を全然文化圏外に放逐し、プロレタリア的社會の建設に參與せしめないといふ事は、どうしても出來ない。それは却て革命を失敗に歸せしめる所以のものであり。無產者國家として其れ程危險な藝當は無い。

プロレットカルトと唯物史觀

私は再び議論の本筋へ引返す。プロレットカルトは、革命の前期と後期とにより、著しく其の內容を變化せしむるとする考への批評である。

(2)其の考へは、教育の內容を決定する動機は、單に政治や經濟だとする唯物史觀說の上に立脚する。其れ故に唯物史觀說を肯定しないものは此の見解を取る事は出來ない。

いかにも教育の內容は、ブルジョア社會とプロレタリア社會との相違により、著しい性質の相違を持たされて居るであらう。さればこそ我々は教化にプロレットカルトの意義を認めたのである。併し教育には、其の經濟的社會構成と何の關係をも持たない部分が含まれる。例へば物理學、動物學、數學といふが如きは、我々の經濟生活により、何の影響をも被る事は無い。其の部分の教育は、——しかも其れは全體の教育の中にあつて大いなる部分を占めるものであるが——少くも政治的革命の前後によつて變化を受ける事が無い。

又其れとは反對に、政治的革命を成就し、プロレタリアの國家を建設したからと言つて、なほ容易には脫却し難きブルジョア的「精神」の痼疾が殘つて居る。恐らく其の精神は、社會的環境によつて養はるゝに止まらず、人間の根柢的なる性格、又は本

能に根ざすものなるが爲めに、いかなるプロレタリア的社會にあつても、すべての人は一度は其の精神を持つに相違無い。隨つて政治的革命は達成せられたにしても、其時からプロレットカルトの實行者自身は其の「精神」から離れ得ないのである。教育の此の如き部分は、革命の前後により、其の內容を變化せしむる事は無い。否寧ろ其の部分の教育は、言はゞ人間の本能自身を訓練する事であるから、人類史の永遠に亙つて、無くなる時を見ないかも知れない。プロレットカルトを斯樣に根本的の意味に解する時には、愈々以てプロレットカルトは永遠的本質的のものと考へられ、表面的なる革命は、其の本質的のものに大いなる影響を加へ得ないと言はなければならない。

然らば其の所謂プルジョア的「精神」とは何であるか。人間の性能の根本に潛む利己主義である。他を支配する事に悅樂を見出す英雄主義である。何物かを蒐集し、利用せんとする一種の本能である。ブルジョア的社會が歷史的に成立するに至つた原動力には、此等の本能的要素の存在する事を我々は忘れてならない。中央集權主義、權力主義、强制主義等はすべて此等の人間性能と深き關係を結ぶ。現在のボリシェーヴィキ、我國のボリシェーヴィキ等が、よしいかにブルジョア的社會を攻擊するとしても、其れの根柢に潛むブルジョア的精神を彼等は完全に克服し得たであらうか。私は其れに多大の疑問を持つものである。殊に價値の世界に於て經濟的價値の獨裁を主張しようとする唯物史觀論者の如きは、其の根柢に一の利己主義的精神を藏するものであり、自らを自由化し、解放する精神に於て、甚だしく缺けたところがあると私は考へて居る。殊にプロレットカルトの主張者は、暗々裡に、革命後の教育は無產者國家の「教權」によつて爲さる可き事を豫定する。果して教育は「教權」によつて强制せらる可きものであるか。其れを考へる事が、例によつてボリシェーヴィキのブルジョア的精神の發揮であると私は考へるものである。其の事は節を改めて論じよう。

教權よりの獨立が第一に必要

(3) ブルジョア國家の教育は、國家の「教權」により强制せられて居る。然るにプロレットカルトの主張者は、革命後の教育も亦無產者國家の「教權」により强制せらるる可き事を暗々裡に豫定して居る。教育といふ一の特定の文化生活を、政治的權力の支配下に置く點では、ブルジョアカルトとプロレットカルトの間に何の相違も無い。併し教育は、此くの如き政治的權力の下に强制せらる可きものであるか。私は其の考へに斷じて贊成しない。教育は政治から獨立しなければならぬ。政治的教權から解放せられなければならぬ。其れは嘗て宗教的教權から解放せられたと全く同じに根據と仕方とを以て。さうあつてこそプロレットカルトは眞のプロレットカルトになる事が出來る。元來他人へ强制する事の好きなボリシェーヴィキ、隨つて我國のプロレットカルト論者は、其の事に何等の注意をも拂つて居ない。私が特に此れを主張して置く所以である。

教育とは、人間の內奧の理性を喚び覺ます活動である。其の理性が正しく發動する時には、信ず可きものは自ら固く信じ、否定す可きものは自ら固く否定するに至る。教育せらるゝ人間の自律的判斷を害してはならない。其の自律的理性の判斷活動に對しては、社會も國家も皆な其れの對象とならなければならぬ。隨つて其の判斷活動の對象となる可きものが、教權の所在となり、自らに都合のよい內容を獻立して、教育せらるゝものゝ上に强制することは、甚しい不屆きだと言はねばならない。

のみならず、教育は人間の自づからなる要求である。强制を俟つて始めて活動を起す樣な、根據の薄弱なものでは無い。

人間の要求は、其の種類に隨ひ、生活に幾多の部面を分つ。經濟活動、政治活動、乃至學問、宗教、藝術の活動等、我々の生活は複雜に立體的に構成せられて居る。

そして此等の各生活範圍は、其れ々々に自律した價値を持つ。一の價値範圍は他の其れにより決定せらる可きでは無い。教育も亦此の如き、一の獨立した文化價値範圍である。隨つて、政治や經濟やの權力によつて、何等か決定せられ、强制せらる可きものでは無いのである。社會に於ける教育活動は、教育活動自身を以て獨立しなければならぬ。若し其の活動を社會的に規制する教權を必要とするならば。教權は宗教や國家の手中に捕へられず、教育活動自身の中に、自律的に止まらねばならない。此くして私は、あらゆる教育の教權よりの解放を主張する。革命のプロレットカルトが、依然として無産者國家の教權の力により、其の教育内容を決定し、其の決定せられた内容の教育を民衆の上に强制するとせば其の教育の弊害は、ブルジョア國家に於ける其れと何等選ぶところは無いとし、私は其れに非難を發しようと思ふ。

プロレットカルトの根本道場

私の考察には一段落ついた。最後に考察す可き問題は、「然らば正しい意味に於てのプロレットカルトの方法如何」である。私は先きにプロレットカルトは、其のあらゆる時期に於て、飽くまでも半ブルジョアカルトであるより外は無いとしたが、併し其の半ブルジョアカルトの形式の中より、純粹のプロレットカルトを次第に生み出して行かなければならない。プロレットカルトの方法の考察とは、其れ故に結局は、半ブルジョアカルトの中よりプロレットカルトを生み出す方策如何の考察となる。

私は便宜上結論を先きに言ふ。あらゆる教育に於て自由教育は其れの根本原理であるから、隨つてプロレットカルトも亦徹頭徹尾自由教育の原理を取らなければならない。其の方法に於て、又其の内容に於て、現代の教育を批評する時には、詰込

主義的であるとか、宣傳的であるとかいつて非難するにも拘らず、プロレットカルト自身の問題になると、自ら詰込主義的となり、宣傳的となる、非自由教育の徒を私は排斥しなければならない。

現代の教育は其の何れの部分を見るも、ブルジョア的特色を持つ。然らば此の中からは絶對にプロレットカルトは生れ出て來ないか。私は斷じてさうは信じない。人間の理性の眼覺めて來る仕方は、AからAが生れる其の推移とは違ふ。AからA＋Xが生れ出るのが、人間の生長だ。そして其の生長は、他からの影響によつてのみ起るのでは無く、結局は生長の性能は、生長するもの自身の中に存し、其れが自律的に展開するのである。若し其れを信じないとすれば、人類の文化には何の進歩も見られないことゝなる。

其れ故に、現代の教育はいかにブルジョア的特色を持つにせよ、其の特色の中から、其の特色により教育せられたものゝ中から、自づからブルジョアカルトへの不滿、プロレットカルトへの要求は生れ出る。我々は先づ其の自づからなる創造の芽生えを持たなければならぬ。若し一旦此の如き芽生えが現はれ出たとすれば、其處は卽ち我々のプロレットカルトの根本道場である。其の如き根本道場が、幾つかの場所に於て發達したとすれば、我々は後次第に其等の道場の聯絡統一を策しなければならぬ。併し其の場合にも、我々は一々の道場の自由なる創意心に拘束を加へてはならぬ。此れは私が社會改造のあらゆる方策に就て言つて來たものと、全く同じい理論根據に立つのである。

プロレタリア的創意心への信頼

右の如くにしてプロレットカルトの道場は定まつたとしても、其の教育に從ふものは、やはりブルジョア的教育の中で育つて來、ブルジョア的教育の弊害を離れて居ないものだとすれば、又同時に實行せらるゝプロレットカルトは結局半ブルジョ

アカルトであるより外は無いとすれば、さうした人達によつて爲さるゝプロレットカルトは全然無意義のものでは無いか。かうした疑問が起る。例へば或る論者は、現在のブルジョア的教育の中から育つた知識階級の手によつて爲さるゝプロレットカルトは何等の意味をも持たないものであり、眞のプロレットカルトは革命後に於てしか行はれ得ないものであるから、我々は現社會にあつての不完全なプロレットカルト運動などに力を割くよりは、全力を擧げて無產者社會の現出に努む可きであると論じて居た。併し私は其の議論に贊成しない。先づ此の論者の考へるところを見れば、革命さへ行はれゝば直ちに完全なプロレットカルトは行はるゝとするものの如くであるが、事實としてはさうした事の起り得ない事を私は既に論じて置いた。次に其の教育を爲すものはブルジョア的、又は半ブルジョア的教育者であるから、其の中からはプロレットカルトの精神は生れ得ないとするものは、教育を二二が四的の機械的の仕事と解し、一の創造的の仕事である事を知らないものである。

教育は先きにも言つた通り、AからAを生むことでは無く、AよりA＋Xを生む、一の創造的事業である。

其れ故に其の教育はよし半ブルジョア的であるにせよ、仕方によつては其中から幾らでもプロレットカルトの精神が生れ出て來る。プロレットカルトの教師として囑托するものは、全然ブルジョア的なる學者又は專門家であつて、其れで何の差支へは無く、又現にさうするより外に方法は無い。たゞたのむところはプロレットカルトの要求に燃える其等少數の民衆のプロレタリア的創意心のみである。

ルトゲルスの知識階級論

此のことは先きにも述べた如く、現に露國では問題となつて來た。レエニン氏を始めとして、ボリシェーヴィキの幹部員は、ブルジョア的知識階級（インテレクチュアルス）に依賴する事は已むを得ないとし、其の方策を取つたに對し、勞働者の大衆は、其等のブルジョア

的要素と絶縁し、直ちにプロレタリア文化を創出しようと欲した。勿論此くの如くにすれば、知識技術の程度は一時減退するでもあらうが、併し其の危險を惧れて居れば、彼等の文化生産の經過からは、何時までもブルジョア的要素を排斥する事が出來ず、隨つて他面には眞正のプロレタリア的勞働者は其の創意心を伸長せしむ可き機會を持つ事が出來ない。勞働者の大衆は、强く其の事を主張した。其の論者の一人にルトゲルス氏がある。

ルトゲルス氏は、カアル・ラデックの論文『世界革命の發展と共產黨の戰術』[Karl Radek, Entwicklung der Welt-Revolution und die Taktik der K. P., 1919] に反對したものであり、其の趣旨は、先きに紹介した彼の論文『知識階級と露西亞革命』[S. J. Rutgers, The Intellectuals and the Russian Revolution.] に强く現はれて居る。等しく共產黨員の一人でありながら、プロレットカルトの方法に就ては、ラデック氏は正統派に屬し、ルトゲルス氏は寧ろコロンタイ女史等の意見と共通的なるものになつて居るのである。

精神的失費を不可避とする

ラデックのいふところでは、『無產者獨裁は、知識階級を脅かしはしない。彼等が貧しき、困厄せる大衆の味方である限りは、彼等は支配階級として組織せられた無產者の參與者である』とした。ルトゲルス氏は此れに反對して、「ラデックの議論はブルジョア知識階級と知識階級一般とを同一視したものであり、恰かもカウツキイが、ブルジョア、デモクラシイとデモクラシイ一般とを同一視したに等しい」と冷笑する。そして「ブルジョア知識階級の問題に於ける誤謬はブルジョア、デモクラシイに關しての誤謬よりも、より以上に根本的なる、又危險なる誤謬である」とする。何故なれば、彼に隨へば、「ブルジョア、デモクラシイの如きは、ブルジョア知識階級が勞働者を攻擊する特別形式の一つにしか過ぎない」からである。

此くしてルトゲルス氏によつては、ブルジョア知識階級の勞働者への對向、言ひ

換ふればブルジョア文化のプロレタリア文化への對向は、最も基礎的のものであり、其れはブルジョア、デモクラシイの形式をすらも蔽ふものであるとせられたのである。

勿論此の如くにすれば、革命後の無產者國家は、其の精神的文明に於て失ふところは大いなるものであらう。併しルトゲルス氏は、其の多大の犧牲も、プロレタリア文化建設の爲めには已むを得ないとする。彼はいふ。「プハリン氏は、革命の爲めに與へらるゝ生產行程の變化と、其れに伴隨して起る大いなる物質的の失費を論じた。其の失費を冒しても革命は爲されねばならなかつた。」『併し物質的失費と同樣に、精神的失費は避ける事の出來ないものであり、且つより高い發展への一の條件である。』

創意心を基礎とする

此のルトゲルス氏の主張は、確かに勞農露國の革命に參畫した一部の人達を代表した見解であつた。コロンタイ女史がかの「勞働者反對」の主張を序した有名な論文に於て、ブルジョア專門家の重用を非難し、『勞働者の創意心は我々に取り缺く事の出來ないものだ。然るに我々は未だ其れへ發展せしむ可き機會を與へたことが無い』と論じたのもやはり同じい要求を發したものである。革命の直後に於ては、無產者國家の產業的文化的建設は、ブルジョア知識階級の助力を俟たないでは出來ることで無い。卽ち其の敎化は半ブルジョアカルト或は進んでは單なるブルジョアカルトであるより外はない。其れは革命によつての社會的破壞を、出來るだけ少ない程度に止める爲めに忘れられてならない重大の決心である。併し其の社會的安定性の方を餘りに强く顧慮するとすれば、無產者は折角政治的革命を達成したにも拘らず、文化の方面に於ては依然たるブルジョア文化の世界に呼吸し、プロレタリア文化の發達への機會が與へられない。此の實際的矛盾を我々はいかにして適當に解

決する事が出來るであらうか。

我國のボリシェーヴィキは、さうした矛盾などには一向頓着無しに、「勞働者反對」が共產黨內の異分子と見られた時には、勿論「勞働者反對」は間違つた思想を取るものであるとし、コロンタイ女史などを排斥するにも拘らず、プロレタリア文化論プロレットカルト論を爲す時には、ルトゲルス氏の主張にもう一つ足を掛けた程の潔癖なる議論をして半ブルジョアカルトを排斥する。空元氣のある點は感心出來るかも知れないが、私は其等の主張に統一無く彼此矛盾する事をさへ意識し得ない單純さを嘲笑する。併し實際に革命を達し、國家を組織化しつゝある露國としては、何とか此の事實問題を解決しなければならない。私は今其の問題を種々反省して見たが、此の實際問題は、露國の實情に就き詳密なる調査を遂げざる限りは何とも斷言する事が出來ない。そして其れよりももつと根本的のことを言へば、要するに露國の革命が時期尙早であつたればこそ、此の問題を生じたのであると思ふ。恰かも其は、新經濟政策の價値を論ずると同じい問題である。プロレタリア文化の發達が、革命前に甚だ高い程度に達して居たとすれば革命後にプロレタリア文化の興隆する事は甚だ容易であり、且つプロレタリアに創意心を發揮する機會を與ふることは、革命を成功せしむる上に就て、何の危險をも齎らさないであらう。露國革命が眞に革命したものは政治的革命だけであつた。經濟的には革命を達して居ないのみならず、より重大なる意味を持つ文化の世界にあつては、勿論其の革命の甚だ初步を達したにしか過ぎない。さればこそ此の如き問題は起つて來たのである。本來敎育は、敎權てふ政治的權力の支配から脫しなければならぬものであり、隨つて絕えず其の拘束を脫しようとして居るから、政治的革命の達成は、敎育の上に直ちに其の影響を及ぼすことが出來ないのである。

此くして私は、プロレットカルトを社會改造運動の中の最も根基に橫はるものとするが、併し其の方法は現制度の下にあつて許さるゝ限りの半ブルジョアカルトで

ある事を何等恥辱とするものでは無く、其の組織は教權を離れて自由なる、眞に民衆の發意する要求を根基とする。此の如き小集團の複合的社會的擴充は、キャタストロフィックな所謂革命を待たずして、社會改造の目的を達し得べしと主張し、其の根本的信念の下に自らの運動を繼續するものである。

（「文化」大正十二年四月、五月）

第四編　藝術と自由教育

藝術教育論

I believe that the object of education is the freedom of mind which can only be achieved through the path of freedom —— though freedom has its risk and responsibility as life itself has. —— R. Tagore, "My School"

余は教育の目的を精神の自由であると考へる。其は自由の道を通してのみ達成せられる。——よし自由は、生命自身が然る如く、此れが危險と責任とを持てども。——ラビンドラナート・タゴール「我が學校」中より

一

私は中途半ばの事が嫌ひであります。いや寧ろ物事すべては其の道理を突き進めて見れば、中途半ばの許されるものでは無いと信ずるのであります。例へば眞理を究める。何處まで眞理を究めたとて惡いとは言へない。道德を實行する。何れだけ嚴肅な道德家があつても其れは極端だと責める譯にはいかない。すべての事がさうした一本途を進んで、進めば進むほど其の途を精練してこそ參れ、何方かの方向へ外れねばならぬとか、或る度合の處で止まらなければならぬといふ事は無い筈であります。先きに私は「自由」の意義を明かにし、自由と此れに類似した放縱氣儘の概念とを區別致し、自由の過ぎたものが放縱になるのでは無い、自由は何處まで進んでも不都合の生ずる事の無い一本道だといふ事を說明致しました。その道理をよくお考へ願ひます。（拙著『自由教育論』上卷參照）其の道理があらゆる物に適用出來るのであります。一體世間でかうした中途半ばを許す事を考へる樣になつたのは、自然科學の弊害を受けたのである。自然科學はすべてのものを量として取扱ひ、此れに數量的の限定を施さうと致しますが、其の餘弊としては數量的に取扱へないものにまで數量の尺度を押し欲めようといふ事になつた。此の傾向が至る處に現はれて居ります。例へば「善」といふものを「最大多數の最大幸福」だなどと言ふものがありますけれども、善の標準に「最大多數」だとか「最大幸福」だとか數量的の言葉を使用出來る筈は無い。善は果てしの知れない一本途でありません。すべてが其の通りであつて、正直がよいならば、何んなに正直であつても正直だからといつて咎められる譯は無い。若し咎められるとすれば、其れで無い他の道德が足らなかつたと言ふのでなければならぬ。例へば正直は正直であつたが叡智が足らなかつたといふ樣なものである。正直自身は叡智によつても其他何によつても、決して拘束せられる理由を持たないのであります。

然るに世間で穩健だとか常識的だとか言はれて居る人達は、其の一本途を徹底的に追つて進む事にどうも臆病である。いゝ加減の處で尻餅をついて了ふ。そして其れ

が穩健であり常識的であると思つて居る。教育界などには斯うした例が甚だ多い。其の癖修身科でさうは敎へて居ない。正しいと信ずる事には何處までも猛進せよ、國家の爲めには生命をも犧牲にせよと敎へて居る。つまり一本途を進む爲めには自己生命の滅盡を計つてもよいと敎へて居るのであります。然らば敎育上の諸概念に就ても、何故其れだけの一本途の考へを通さないか。かういふ處に打破す可き敎育界の妥協心が潜んで居る。私の考へる處では、理性に隨つて眞直ぐに一本途を進む、此れほど穩健であり常識的である事は無い。カントは『我が上には星の空。我が內には道德律』と申して道德律の光輝を讃美しましたが、如何にも道德律の尊嚴を天上の輝ける星によつて象徵した處は中つて居る。星夜の天空は何處まで進んでも到達する事の出來ない悠久な、又甚だ崇高沈着なる感じを我々に持たせる。我々の進む可き一本途は、皆な此の星夜の天空の如き悠久さを持たねばなぬのであつて、其の間には些の妥協も許されないのであります。

二

學校の敎科書の目的を讀んで見ますと、(敢て此れのみに限らず人事萬端にさうした事はありますが) 其の目的にはいろ〳〵のものを書き並べてあります。丁度藥の效能書きに、腦病、胃病、脚氣等いろ〳〵と書き並べるのに類似して居ります。例を擧げて見ると、或る科目の敎授目的を一つには創作力を養成する、二つには觀察の力を練る、と定めたと致します。さう致しますと、此れは全體として一體どういふ事を定めたのでありませうか。(1)二つの目的がどつちも一本途であつて、極はまる處無く追究せられねばならぬといふのか。(2)全體の力が1ならば半分半分の力を此の兩方へ出さねばならぬといふのか。(3)其れとも一方の過ぎるのを常に他方で以て牽制しなければならぬといふのか。此の三つの區別がどうも明瞭でありません。私は是非とも最初に此の區別を明瞭にして貰ひたいと思ふ。何故なれば爭論

はいつも此の點をぼやかして置く事より生じて來るからであります。一例を擧げて見ると、私が此の目的を楯に取つて、「其れだから出來る處まで創作力を養はなければならぬ」といひますと、或る人は其れに對し、「併しさう〳〵創作力許りの養成を計られては困る。他方に觀察の力を練らなければならぬでは無いか」と申して反對致します。私にはどうも其の反對の意味が分りません。「では觀察の力の方も出來るだけ引き伸したらよいでせう」と言ふと、今度は「ですが創作力の養成もしなければなりません」と答へる。誠に尻尾が押へにくいのであります。斯ういつて反對する人達の眞意をよく忖度して見まするに、要する處此の人達は一本途をひた押しに進む事を何か罪惡か危險かの樣に考へて居るのである。何でも一本途をどん〳〵進むと、其の端は危險だと思つてお居でになる。丁度自由の端は放埒だといふ議論と同じであります。餘り進め過ぎるのもいかぬし、と言つてあまり進めないものもいかぬ、中途半ぱの處に宙ぶらりにして置かうといふのです。言ひ換へて見ると、目的を一つにしないで二つか三つにするのは、極端を防ぐ爲めである、お互ひが牽制運動を遣つて丁度よい具合の處に水盛りを止めてくれる、かう考へて居る樣であります。甚だ不屈きの事であつて、其れならばどんな立派な目的でも、藥は實は毒と考へられて居る。目的をすつかり輕蔑した遣り方であります。

私はかうした解釋には全然反對である。目的が一つで無く、二つでも三つでもあれば、其れは二つなり三つなりの目的が皆な止め度も無く一本途を進んで、其れ其れに妨害し合ふ事無く、ぐん〳〵伸び出して行く、斯うだと考へて居るのであります。

三

此れに就ては未だ申上げたい、否寧ろ申さなければ誤解を招くと考へる事が幾つかありますけれども、序論が少し長くなり過ぎますから、愈々本論に移ります。其

れは藝術教育の問題であります。詳しく言ふと、小學校の何れかの教科目の教授目的を藝術教育に置く。中途半ばに止まるで無く、兒童の藝術感を止め度も無く發達させる樣に取扱ふ。其の事の可否問題であります。私は勿論藝術教育論者であります が、世間の實際教育家や教育論者の中には藝術教育反對論者も隨分多いといふ事である。私は本論に於て主として其等反對論者の主要論點を駁擊しようと思ふのであります。

此等の反對論者の意見を聞いて見ますと、其れに共通なる特色は、やはり自由の場合と同樣に一本途の彼方は罪惡だ。危險だといふ迷信杞憂であります。此の迷信は實に一朝一夕に拔き難い殆ど天性といつてもよいものである。野蠻時代の人間が自分の村落に許り立て籠り、山の彼方にどういふ他種屬の生活があるかを知らない。たゞ山の彼方は危險なものだと考へて居る。其の遺傳的の危險心であります。子供が汽車に乘つて遠足に行くといふ。未だ親の手許を離れた事の無い子供だから、汽車の乘降にどんな危險があるかも知れないと恐れる。尋常三年の子供に二箇月前から尋常四年の教科書を使はせる。二箇月ほど早めた遣り方だからどんな風に子供の腦を傷めるかも知れぬとおそれる。何事でも一歩先方には危險信號が立つて居ると考へて居るのであります。此れは全く人類が其の原始生活より受けて來た重大なる迷信であつて、潔く打破してよいものであります。藝術的に教授しなければならぬ教科目ならば、どんなに高い藝術的の取扱ひをしても其れには寸毫の弊害を伴ふものでは無いと、私は敢て斷言致します。

四

斯ういふ風に議論して來ますと、「其れもうそろ〳〵極端論が出た、過激論が始まつた」とお考へになる方があるかも知れません。もう少し御辛抱して其の先きをお讀みになる事を願ひます。私はさう〳〵過激な議論をして居るのでは無い。至極合

理的な立論を致して居るつもりであります。

藝術教育論に反對する人達は、一體藝術なるものをどういふ風に考へて居るか。其の點を最初に考へて見ませう。私の考へます處では、其の人達は大抵次の何れかの解釋を藝術に就て持つて居る。(1)人間が藝術心を持つのは惡い事では無い。併其の程度は現在の大人が持つて居る位の程度で結構だ。(2)藝術も大切なものには相違無いが、其れよりも食ふこと、實生活を送る事の方が大切だ。衣食足つて然る後藝術を云々する事が出來る。藝術は言はゞ第二義的だ。其れ故に教育も亦實生活への準備としての教育の方面を重要視しなければならぬ。(3)藝術も其の常識的の程度に止まつて居る間はよいが、其の程度の進んだものは普通人に寧ろ有害である。兒童が所謂藝術家の樣な人間になると大變だ。(4)全體として人生は藝術では無い。人生は最も嚴肅なる實生活である。功利生活である。

此の批評を見て行きますと、第一から第四へと次第に其の反對度が進んで參ります。第一は現狀滿足論であり、第二は藝術第二義論であり、第三は進んで藝術有害論である。さて最後の第四は更らに全體的に人生非藝術論であります。此等の名稱は隨分不適當ではありますが、今分かりのよい樣に、假りに此の名を附して置きます。さて其等の一々は道理ある反對論であるか。今一々に非難の中心點を考察し辯駁して見ませう。

(1)現狀滿足論

藝術心は結構な事には相違ない。だが此れは又米の飯の樣に大切なものだとも考へられない。大體に於て藝術心は現在の人間の持つて居る程度のもので結構では無いか。かうした非難であります。此の論者は少ない樣に見ゑて實は案外多數です。いや多數といふよりは、藝術教育反對論者の議論の根據に、皆な此の現狀滿足論が潛んで居るといつても過言では無い。德川封建制度の誠に窮屈極まる時代空氣ではぐくまれて來た現在の老人などは、殆ど全く藝術の如何なるものであるやを知つて

居ない。藝術教育に就ては極端なる保守論者であります。

此の論は甚だ無謀なる議論である。我が國人の現狀に於ける藝術感は此の程度のもので結構だと信じて居りますものは、丁度不健康者許りが揃つて居て、健康の程度は此の位で結構だと考へて居るのと同樣であります。我が國現在の藝術感などいふものは、實の處まるでお話になつたしろ物では無い、國民の大多數は藝術に取つて全く無感覺と言つてもよい位である。早い話が音樂會がある。隨分澤山の入場者がありますけれども、あの中の何割が本當に音樂を理解して居ますか。樂譜の讀み方さへ知らないもの、樂界の歴史的に著名なる作曲家の名前も知らないもの、此れが亦何割あるか知れません。併し其れは先づ無理は無いと致しまして、繪畫でもやはりさうである。帝國美術院の美術展覽會へは毎年入場者の數が殖えて來る。數は殖えるけれども其の人達の鑑賞眼は誠に程度が低い。批評などを側で聞いて居ると冷汗の出る樣なのがある。尤も其の審査員の鑑賞眼からしてが大體怪しいのである。

から、見物人には無理でないとも申されませうが、併し我々は到底此の程度のもので滿足は出來ない。國民の中でオルガンが彈けるとか、繪が描けるとか言ふ人は、此れは誠に寥々たるもので。全體の何パアセントか、誠に恥づかしいものだらうと思ふ。貴婦人連が會合致しましても、會話の材料が無い。小說は讀み易いから、暇暇に耽讀致しますが、それに就ての批評が無いのであります。西洋の小說などを見ますと、一寸家族が寄り合ひましても、樂器を彈いて皆んなで歌ふとか、文藝物の批評をするとかいふ場面があつて、何と無く人間が高尙に感ぜられますが、我國の商人などだつたらどうでせう。又婦人などだつたらどうでせう。「近頃はもうかるね」とか「お洗濯物は濟みましたか」とかいつて話合ふより外は無い。實に寂しいものであります。

然らば我々日本人には元來高い藝術心が無いのか、子供の時からさうした能力を持つて生れて來なかつたのか、と申しますと、決してさうではありません。子供は

立派にそうした能力を、どつさりと貰つて生れて來て居る、機會さへあれば其れを伸ばしたくて伸ばしたくて仕方が無くなつて居るのです。自由畫運動以來、子供の書いた作品を見ると此の事はよく分かると思ひます。此の間或る會合があつた時、いろ〳〵と話した事でありますが、其の時列席して居られた何名かの大學教授の方方は、お互ひに自分達の子供がみんな立派な藝術家であるのに驚いて居られた。「あんな立派な繪が書けると思ふと不思議だ」とか、「あゝしたこみいつた樂譜を何の苦も無く彈くのを見て居ると子供ながら大層偉いものゝ樣に見えてならない」とかいふ事でした。誠に此れは子を持つた親の近頃の感慨だらうと思ひます。すべてに於て自分を標準にして居る。知らぬ間に自分を標準にして居る。繪は此の位、音樂は此の位しか分らぬものだと思つて居るのである。何ぞ知らん、其れは生れて此の方其の能力を伸ばさないで、寧ろ逆に押へつけ踏み躪りし、其の芽を枯らして了つて居るのであります。現在の自分を標準にする事は斷じて避く可きであります。若し今此處に數學や物理學やの力をまるで養はないで生長させられて來た國民があつて、我々を見ると致しませうか、彼等は我々がぐん〳〵と計算したり實驗したりするのをまるで奇蹟の樣な眼で見るに相違ありません。(我が國人と西洋人とを比すると、理科の方面でも一般人の修養は甚だしく不足して居る。併し今は其の事に觸れないで置きます。)

以上の如き理由でありまして、現在の大人が自分の藝術感を標準にして子供を見る事は甚だ怪しからぬ事である。子供の藝術感を高めるのは極めて容易な仕事であつて何にも特別に子供に無理をさせねばならぬといふのでは無い。大人はしばらく其の仕事を教育者に任せて、「成るほど我々は子供の時にさうした教育を受けなかつた爲めにかうした明き盲になつて居る子供だけは其の明き盲にしたく無い」と考へなければなりません。又藝術教育反對の教育者諸君も同樣にして、「危い處であつた。もう少しで子供を我々同樣の明き盲にしようとした」と深く反省す可きであります。

五

(2)藝術第二義論

藝術も大切なものには相違無い。併し其れよりも大切なのは實生活への準備を計つてやる事だ。此の考へは藝術をば實生活とは割合に關係の薄い贅澤品裝飾品の樣に考へて居るのであります。併し此れ亦大變の間違ひである。藝術は斷じて其れしきの輕々しいもので無い。教育家は二口目には、實生活への準備といふ事を言ふ。此れには私は多少の意見を持つて居るのであつて、又後に其議論をして見たい。今は一先づ其の議論を避けて置きますが、よし其の主張が正しいと致し、(私は其の主張を全然的に正しいとは思ひません)又實際小學校でやつて居る教育が其れだけの準備教育の效果を發揮して居ると假定しましても、(私は其の效果を發揮して居るとは信じません)一體學校が子供に、食ふ爲めの準備を與へて居れば、其れで教育の意義は立つて居るか。むづかしい事を言ふのは厭やな事でありますけれども此處に一つの疑問を持ち出して見ませうならば、一體人生の意義は食ふといふ事だけであるか。苟くも教育は人間に人生の意義を教へるものでなければならぬ。人間を動物として育て上げるのでは無く、人間を人間として、光りを持つた人間として育て上げるのでなければならぬ。體育なり、知育なりがすべて其處を出發點としなければ何の意味も無い。近來の教育は其の點の注意が甚だ薄弱である。人間を單に動物として育て上げる事許りに腐心して居る。かう申しても極端な言葉では無い。

人生の意義は凡そ何であるか。人生には光りがあるといふ事である。理想があるといふ事である。理想を追究し、理想を實現して居ればこそ、人間は動物と異り、又同時に生き甲斐があるのである。教育は子供に此の理想の光りの見える樣な導きを與へる事であります。私は確固として斯樣に信じて居る。卽ち養護にせよ、教授にせよ、皆な此の同一尖點の周圍に渦を卷いて居なければならぬのであります。

食ふ爲めの準備許りを言つて居る論者に私は申したいのであります。人間を育て上げるに、たゞ食ふ爲めの途を敎へれば其れでよい、と斯樣に考へて居て其れで敎育の仕事が出來て居ますか。子供に理想の光りを見る眼を明けてやらないで其れで敎育者の本務が盡されて居ますか。或は斯樣のお答へがあるかも知れない。「如何にも理想は大事だ。併し其れもまあ食ふ事が出來てからの事だ。衣食足つて禮節を知るでは無いか」と。誠にもつて生ぬるい言ひ方である。大體此の人達は、小學校で行はれる實生活への準備といふものゝ效果を大きく見誤り過ぎて居る。大分の手柄をやつて居る樣に思つて居るのであります。併し其れもまあよいとして、私の考へでは子供に理想を見さすこそ敎育の本義であるから、實生活への準備は先づ第二義としても、此の第一の仕事だけは小學校で是非ともやりたいものである。いややらなければならぬものである。其れが出來なければ敎育などはまるで無意義な仕事だ。たゞ多數の肥えたる動物をつくつたに過ぎない。斯樣に思ふ。實生活への準備などは學校の力許りを用ひずとも、學校以外の家庭や社會でいくらでも敎へられる機會がある。何にせよ、近來の小學敎育へは父兄側も餘りに多くのものを要求し過ぎる。敎育當局者も亦敎育の根本目的を確立しないものですから、敎科目なり、其れの取扱ひなりに、心の動搖を示して居る。やたらに澤山のものを注ぎ込まう、やたらに澤山の藝を覺え込まさうとして居る弊があるのであります。

さて然らば其の人生の理想、光りとは何であるか。私達は此れを價値と申しますが、價値には眞、善、美、がある。此等の價値の光りを子供に見させなければならぬのであります。藝術敎育は第二義的だなどゝ考へる人は大變な間違ひを子供の上に加へて居るのであります。

六

(3)藝術有害論

藝術も其の常識的なのはよいが程度の進んだのは困る藝術的教育はよいが藝術家教育は弱る、かうした批評であります。「藝術家にするのぢやあ無い。」かうした非難をよく聞きますが、此の非難者には二通りある。一つは第一の現狀滿足論者であり、他に一つは唯今の藝術有害論者である。何にも藝術家といふ專門家にするのぢやあ無い。此の位の程度の教へ方で十分である。此れが第一類です。藝術家といふ樣な不具偏執者になつて貰つては困る。現在位の程度で丁度よいところだ。此れが第二類です。

今は此の第二類の非難者に對し辯駁致します。此の樣に專門的の藝術を危險物にするのは一體どういふ處から起つたかと申しますと、(1)第一には、藝術的の部面許りが發達して、生活の他の部面の發達の足りない、一部の藝術家を以て全般の藝術家を押したのである。或は寧ろ精神の一部に缺陷のある樣な人間を藝術家だと思つて居る。其の缺陷性を憎む爲めに藝術家全體を憎むに至つた。(2)第二には、藝術と趣味或は道樂とを混同する。趣味或は道樂は人生に取つて贅澤物或は時に有害物である。此の趣味或は道樂の生活を送つて居るものを藝術家生活だと見誤つて藝術を憎むに至つた。此の二類あるのであります。何れも全くの誤解だといつて宜しい。

私は今、藝術教育を高潮して居りますが、藝術教育だけが教育の全部であるとは申して居りません。此の外人間價値のすべてに亙つて其の價値を盡くる處無く追究する道德教育、眞理教育其他何々教育があつてよい譯である。いや必らずなければならぬのであります。其れによつて人間天賦の諸性能を完全に發揮しようとするのであります。其れが教育の仕事であると致しますれば、我々は藝術教育の方面では藝術家たる事を希望するだけの藝術教育を施して居て何の不都合も無い。何處までも美的價値を追究しようとして居る子供を捕へて、「お前は行き過ぎて居る」といふ事の出來る人間は一體無い筈である。其の制約は神樣にさへ許されて居ないのであります。藝術教育の方面では藝術家をつくるだけの教育を必要とする。たゞ先きに擧げた樣な、生活の一部に缺陷ある藝術家があるとしましたら、何も其の缺陷を模

するに及ばない。缺陷があるから藝術家だ、藝術家の缺陷ある部面が眞の藝術家だ、といふ事は無い。藝術家の藝術家たる部面をお手本にすればよい。そして其の缺陷だと思ふ處は、又他の道德教育なり眞理教育なりで、徹底的の完成を計るやうにすればよい。終局は此等すべての價値教育によつて完全なる人間生活を作り上げるのであります。

次に藝術と趣味又は道樂とは違つて居る。美は人生の理想でありますが、道樂は人生の享樂であります。もう一つ言ひ換へれば前者は普遍妥當的基礎を持ち、後者は一時的氣分の產物である。前者は人格の進歩であり、後者は人生の滯留である、其の値打ちの相違は大きなものであります。趣味或は道樂がよいか惡いかを唯今は申しませんが、兎に角此の兩者を履き違へて、藝術有害論を爲す事は御免を蒙りたいものであります。例へば田舍へ行くと、文藝青年といふがあつて、和歌を作つたり、詩をつくつたりして居る。處がその中の大抵なのは、和歌や詩を趣味として、道樂としてやるのである。文藝同人雜誌などを拵へて居る青年を見ましても、藝術をほんの道樂に取扱つて居るのが大分にある。藝術家などが參りますと、何か風流人でも來た樣な態度で扱はうとする。どうも日本には惡い癖がありました。文人墨客とか申して風流一偏に世を送り、まるで金持の幇間の樣になつて酒席の玩みを書いたりして居ました。唯今でも日本畫家の中にはかうした幇間が澤山にあります。金持などは、此の文人墨客のやるのが藝術といふ贅澤物だと思つて居ります。大變な間違ひである。此れは藝術では無くて、趣味又は道樂であります。藝術教育は此の樣な文人墨客趣味を養ふ事ではありません。

七

(4)人生非藝術論

愈々最後の一般論を辯駁致します。此の點に就ては大分に詳しく拙著『文化主義

原論』の中で述べて居る處があります。なほ『中央美術』八月號〔大正十年〕へ『第二ルネッサンスと藝術』といふ一文を書いて置きましたから、其れを御參照下さいますれば大變好都合であります。〔次章として插入して置いた〕

此の第四の批評は一般論として、人生を功利的實利的のものと考へ、此れより藝術性を廢棄しようといふのであります。人生は嚴肅なる實生活である。我々の生活內容を豐富にし、今後益々文明開化の生活を營まんが爲めに、自然科學の知識を一般に養ひ、工學や理學を發達させて民利民福を計らなければならない。文藝だとか美術だとか、閑人のやる遊戯に精根を費して居ては、我が國運の將來も憂ひに堪へない。教育者はもつと實利實益を考へなければならない。此ういふ風に老人連だとか、政治家だとか又國家を憂ふる老校長さんは申します。小學校へお出でになつて御覽なさい。片隅に硝子棚があつて、其の中には民利民福を計る殖產興業の標本が博覽會よろしくに竝べられてある。恐らくは此の地に產業博覽會のあつた時の遺物でありませう。國利を增進し產業を興隆せしめなければならぬといふ意味の掛け額が講堂などにかゝつて居ます。重要產物の製產順序などが色刷畫になつて、安つぽく教員室內にかゝつて居る。何から何まで乾燥して居る。廊下などは綺麗さつぱりと拭はれて居るのに、何から何までが蒸せる樣の感じである。打つてある壁板の釘の頭の大きいのまでが自分を壓迫する。といつた風の狀態であります。私は今はつきりと、さうした空氣の中に育つて居た少年時代の自分の憂愁を感ずる事が出來ます。全く此れは看過す可からざる少年虐殺であると思ふのであります。

此うした人達には國利民福といふ樣な概念が、すつかり骨化して了つた、甚だ堅固な迷信になつて居るのであります。國利民福、甚だ結構な事には相違無い。理科教育は大いに振興す可きである。我國の理科教育などは未だ々々恥づかしくてお話の出來ないものである。國民全體まるで自然科學への興味を持たないと言つてよい位である。あんな間違ひだらけの色刷畫などで動物の習性を說明したり、產業の生產

順序を説き聞かせたりするのでは理科教授に生氣が無いのみならず、却て害をすら及ぼす事がある。さうした狀態に我が理科教授があるのでありますけれども、さて此の理科教育を徹底的にやるといふ事と藝術教育を奬勵するといふ事との間には何の矛盾撞着も無い。理科教授に於てゞさへが、あんな色刷畫で教へるよりは、綺麗で面白い活動寫眞でやつて見せるとか、（此の普及に就ては種々の方策が建てられる）間違の無い三色版寫眞を美しく廓大したもので說明するとか、藝術的にやつた方が、どれだけ大きな效果を奏するか分らない事であります。

議論が少し他へ外れ過ぎて、私の申さうと思つた論の中心點から離れて參りました。元へ歸つて申上げます。斯樣に、國利民福を計る實利本位の教育は惡るくは無い。併し其れだけでは全體として大いに足りないものがある。其れは此等の科學的生活の分化に統一が見失はれて行く事であります。文明開化になるのはよい。が併し餘りに分化して了つて、其の統一を失ふては困つたものである。此れは他面なる我

我の藝術生活が忘れられて來たからである。近來の文明は此の點に於て著しく自己の缺陷を認めて參りました。生活を藝術化せんとする運動は、現代文明の行き詰りを救濟する重大意義を持つて參りました。其れは社會主義者の中にさへ强く認められる近來の傾向であります。私は此の點を此れまで申しました中では最も重要のものと考へて、藝術教育の必要を痛感して居るのであります。併し其れは他で申して居る事と幾らも重複した議論になりますから、最も重要であるにも拘らず、此處では詳述を避けて置きます。

八

以上私は大體藝術に對する間違つた考へを辯駁して見ました。藝術教育に於ける藝術は此の間違つた意味の藝術であつてはならないのであります。

一括して次の如くに申して置きませう。

藝術は贅澤に非ずして人生の理想、光りであり、其の程度を強むるも何の害無く、否寧ろ我々は究まる處無く其の光りを追究しなければならないものである。人生全體は其の統一の側面より見て藝術であると言ふ事が出來る。此の如き藝術に對する我が國人の鑑賞力は現在甚だ微弱なものであるから、今後一層藝術教育を盛んにしなければならない。

九

正しい藝術の意義と間違つた其れとの區別が出來ますれば、最早藝術教育の必要は明瞭になつたのでありまして、改めて藝術教育反對論を顧慮しないでもよい事であります。併しなほ最後に斯うした反對者から聞いた非難がありますから、極めて簡單に其れに辯駁を申して見ようと思ひます。

(1)普通教育は藝術家の養成では無い。

此れに對して私は却て逆襲的に、藝術家にする位の意氣込みでなくて何の力が發揮出來るか。其んな生ぬるい事を言つて居るから教育に生氣が無くなるのだと申します。(イ)一體此の人達は何を標準にして人間の藝術活動を中途で止めようとするのであるか。藝術教育の方面では藝術家にする位の意氣込みがなくてどうするか。(理科でも其の通り)(ロ)其の人の言ふ藝術家の定義が間違つて居る。(此れは前に言つた。)(ハ)子供の他の方面も同樣の意氣込みで伸ばしてやる。其の上で將來專門の藝術家にならうとする人があつたら、此れは立派に藝術家たる事を志願させてよいではないか。(理科でも其の通り)

(2)藝術的教育は實際生活に必要の程度で結構だ。

此れ亦中途半ば論であります。(イ)其樣にして藝術を手段的に見、應用的に見、實生活に有用な技能を養ふ程度で藝術教育をするのでありますれば、教育の本義たる理想の眼を開かす方面が輕蔑せられます。(ロ)又實用的に考へましても、此の樣に

手段的、應用的に與へられた技能は、いぢかんで居て却て實用的でありません。圖案を見ても分かりませうが、圖案屋の描いたものは固定凝結して居てさつぱり生氣が無い。あたまが實に低級です。反之自然に對しての眼を開かされた人達の描く圖案は甚だ生新です。（八）實際生活に必要な程度の藝術とは一體どういふ意味であるか。其んなものが我々に考へられるか。（ニ）單に常識として藝術の事も少しは分かる人をつくれといふのであるか。此れならば甚だ厄介物である。我が國人は殘薄な八百屋になり過ぎて居る。藝術に就て、さうした「少しだけ分かる人間」を澤山作られたら藝術に取つては迷惑至極な話である。此んな人達がとやかう藝術批評をやつたり、下らぬ創作をやる樣になつたらたまつたものでは無い。教へるならよい加減のものでは無く、本當の藝術を教へて貰ひたい。

（3）圖畫の中には藝術的に取扱へないものがある。例へば用器畫は其れである。用器畫に對する藝術教育如何。

此んな問題を出して藝術教育論者に致命傷を與へた積りで居るものがあります。併し此れは自分の頭がどうかして居るのである。一體文部省の制定した理科、歴史、地理、圖畫、國語、といふ樣なのは、あれが嚴密な學問分類でありませうか。恐らくは文部省でもさうは言はないでせう。あれは單に便宜的の學問分類である。圖畫科の所謂圖畫と我々の所謂藝術、此の範圍を局限しての繪畫とは實は範圍の異つた概念である。此れを同一のものだと早合點する處から馬鹿らしい喧嘩が起きる。用器畫や繪畫やが一緒に便宜的に集まつて所謂圖畫となります。繪畫に就て藝術教育と申しても用器畫に就て其れを申さうとは思ひません。例へば自由畫の問題にしても、繪畫の自由創作とは申しますが、用器畫の自由畫とは申して居りません。圖畫と繪畫とを一緒にする人は教育家の中に極めて多數である。其れを誤るが爲めに、圖畫科の目的をさへ妙な風に書いて了ふのであります。

以上可成り長く藝術教育の議論をして參りましたが、然らば其の觀點よりして現

在の圖畫科や國語科やは如何に取扱はれなければならぬか、此等の點を次の機會に論究して見る積もりであります。（「藝術自由教育」大正十年八月）

第二ルネッサンスと藝術

一

私はかういふ事を經驗する。

私の書齋は一面の麥畑に向ひ、其の麥畑の先方には一帶の松並木が連つて居る。此の並木の松は凡そ何時頃植えられたものであるか其れは知らないが、何でも餘程古いものだと言ふ事は一見したゞけで知れる。其れは殆ど全く東海道の松並木そつくりの形だ。私の書齋へ這入つた來客は誰れもが直ぐに其の並木に眼をつけて「まるで廣重ですね。すばらしい景色です。」といふ。多少センチメンタルで弱々しいとは思ふが私も其の並木は好きだ。雨の後など霧がかゝつてシルウェットになつて見える時、私はぢつと其の平面圖を見入つて、「此れは立派だ」と思ふ。枝が緻密に

からみ合つて居る部分がいゝ。其れから少し離れて疎らに數本立つて居る處もいゝ。丈の高いもの丈の低いもの旨い具合に調和されて何れも素敵にいゝ。ありのまゝの自然が、どうして此んな立派の曲線圖形をつくるのだらうかと感心して了ふ。

併し實はどの自然を取つて見ても、同樣に美しい組合せの曲線を持つて居るのだ。「此れはまづくて仕方がない」と思ふほどのものは、自然のまゝのもの、殊に山や水の地勢、動植物の格好には少ないものだ。其れの何れにも、私は何か知ら獨特の美しい曲線圖形を見つけ出す。

だが偶まには「全く取柄が無い」と思ふほどのものにも出遇ふ。醜があればこそ美も現實する。醜要素を全然排斥すれば我々の藝術的判斷は無いものになる。自然の中に醜の現實を意識するは少しも恥づ可き事で無い。

非常に完成せられた美の曲線圖形と、全く取柄の無い其れとの間には此れ亦無數の表現段階が介在する。其の介在段階の或る一つの形相を取つて長い間鑑賞して居ると、私は其の曲線圖形の中から、其の圖形の發展した最後に到達す可き或る理想的の圖形を想像する事が出來る。そして其の理想的圖形は非常に美しいものであり、此の個性的の美しさは私が此の自然を見る事が無かつたら、決して永遠に意識する事無くして終つたに相違無いものである事に驚嘆して了ふ。無數の表現段階が其れ其れに全く異つた、無數に多くの完成圖形を持つて居る。

不完全の美の表現段階は、其の途によつてのみ到達せられる或るユニイクの理想圖形を憧憬れて居る。感覺界の個物は悉くイデア（理想）の世界にあつてのアナムヂシス（想起）を持つて居る。自然はエロス（戀愛）の勢力が無數の曲線を以て打合ふ闘場だ。

二

或る部分の自然が持つて居る曲線の組合せ圖形は、其れに特有な、完成せられた

或る理想圖形を持つて居る。

併し此の理想圖形が理想圖形だといふ事には何の論理も無い。たゞ我々の生命が然か證驗するだけの事である。此の證驗は單なる主觀的の感想では無い。誰れもが然か感じなければならぬ事を要求して居る。論理の背景にも實はさうした非論理があるのだ。論理が論理を追はねばならぬ事を基礎づけ得るといふ論理は無いと私は思ふ。

理想的圖形は一點非難の打ちどころの無い樣に、きちんと統一せられて居る。少しでも非難せられる點が殘つて居れば直ぐエロスが完成せられた圖形へ其の不完全圖形を動かして行く。(例へば黃金律の比例を有する二邊の圍む矩形と其れに近い形の矩形を考へよ。)其れで物事の統一とはかうした理想的圖形の持つて居る味だと思ふ。雜多を統一する努力とは、此の理想的圖形へのエロスの事であらう。

私は繪畫を鑑賞する精神力を本當に持つて居るかどうか、自分でも疑つて居る。

恐らく多少は持つ居るであらうが、とても一々に此のイデアを認識し得るだけの力を持つて居るとは自信しない。其れは極めて卓越した藝術家自身の多分に持つて居る力だ。時々私は詩を作る。其の場合何かのヒントから或る詩のテエマを得て二聯許りの詩句が出來ると、此の二聯ほどが始終全體を統一する力になつて働き出して居るのを經驗する。詩句のスタンザが四つにならうと五つにならうと、必然的に動かねばならぬ方向へ動いて行く。いや其のスタンザの數でさへが此の最初のテーマによつてきまつて行く。音樂もやはりさうだといふ。或る音樂家から聞いた事であるが、ベエトオヴェンでもモザルトでも、最初のテエマが定まれば、後はまるで數學の方程式が解かれる樣に動いて行くものださうである。

此の事を廓大して考へれば、我々の文化は其の何れであれ、其れ々々に特有な或るイデア(理想)を持つて居ると言へる。論理が論理を追ふて進むことでさへ、同樣にイデアの追究なのだ。音樂でも繪畫でもみんなさうした動きを爲して居る。自然の